

月刊

AMDA

国際協力

Journal



MARCH

2002.3.1

(VOL.25 No.3)



コンゴ火山被災民緊急救援活動グラフ



コンゴ・ゴマ市の被災地



ルワンダ・ギセニ地区カミラ避難民キャンプ



ルワンダ・ギセニ地区カミラ避難民キャンプの子どもたち



孤児となった子どもたちへ栄養支援



子どもたちの栄養・健康状態を診断する



集団感染を防止するための臨床検査

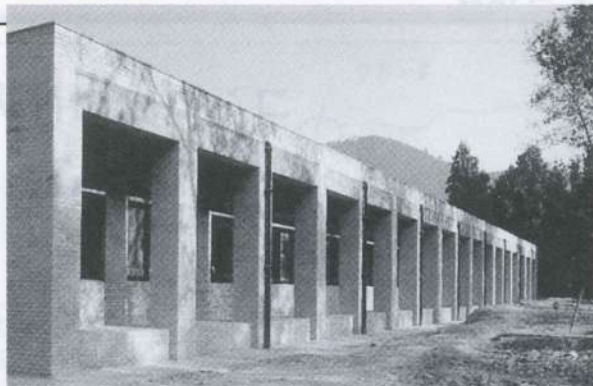
AMDA
国際協力
Journal

2002
3月号

◇
CONTENTS



ネパール子ども病院
篠原記念病棟完成



◇緊急救援	
コンゴ火山被災民緊急救援報告	2
アフガン難民緊急救援報告	8
◇AMDA中国の確かな歩みに触れて	10
◇ASMP: AMDA「魂と医療」プログラム報告	
ミャンマー報告	12
フィリピン報告	17
サハリン報告	18
◇ネパール子ども病院	20
国際協力ひろば	21
AMDA 神奈川支部・鎌倉クラブ便り	22
寄付者一覧	23
事務局便り	24



表紙の写真

コンゴ火山被災民緊急救援
(ルワンダのギセニ地区へ避難した被災者)

AMDAはルワンダのカミラ避難民キャンプで、支援の行き届いていない「臨床検査」と「栄養支援」の2つの支援活動を実施しています。

赤痢の早期発見や集団感染の防止を目的とした便と血液の検査とキャンプ内の孤児約120名の世話をしているNGOへの協力として栄養不足の子ども達へ粉ミルクと毛布を提供しました。

今後もAMDAルワンダ支部が中心となって支援活動を継続して行きます。

書き損じハガキを集めています

*書き損じのハガキ、未使用の切手・ハガキ、各種プリペイドカード等がありましたらAMDAにお送り下さい。

*使用済テレホンカードは収集しておりません。

【送り先】岡山市橋津310-1 AMDA事務局
お問い合わせは、TEL 086-284-7730
FAX 086-284-8959

ご協力お願いします

AMDA 会員ネットワーク
参加者募集

- <amda-jnet@amda.or.jp>
AMDA 会員とのインターフェイス機能を目的とし、EメールでAMDAの動きをリアルタイムでお知らせできます。
(AMDA 速報・イベント案内・人材募集)

ご希望の方は <member@amda.or.jp>
まで、住所、氏名、電話、FAX に併せてお申込み下さい。
AMDA 会員情報局

コンゴ火山被災民緊急救援活動

AMDAは、1月17日夜中、コンゴ民主共和国東部ルワンダ国境付近で発生したニラゴンゴ火山噴火における被災民に対して緊急救援活動を開始した。

以下はその活動報告である。

被災地域：コンゴ民主共和国東部ルワンダ国境付近

活動場所：ルワンダ共和国ギゼニ地区カミラ避難民キャンプ

救援活動：医療支援（「臨床検査」と「栄養支援」）

派遣期間：1月23日から2月5日

（AMDAルワンダ支部は今後3ヶ月救援活動を継続する）

派遣者：日本、ケニア、ルワンダのAMDA多国籍医師団



現地被災状況（現地の活動レポートより）

1) ゴマ市の状況

街の中心部に24メートルの高さのマグマが流れたため、道路が遮断され交通が麻痺した。住居、食糧、衣服、薬、電気、水がなく、商店街、病院、役所、学校が破壊されていた。政府関係者の話によると、街の約8割が破壊され、44校の学校が潰されたとのこと。

AMDAがゴマ入りした時点では、まだマグマから煙がたちこめ、ガソリンスタンドからの出火が続いており、空気が悪いのを感じた。

国連が中心になり、NGOと協調して、人々の生活を元に近い状態に戻すことができるよう努力していた。人々は長い列をなして、支援物資を待っていたが、まだ十分ではなかったようである。

人口40万人のうち、約20万人がコンゴのプカブ、ルワンダのギゼニなど

へ避難したと伝えられた。

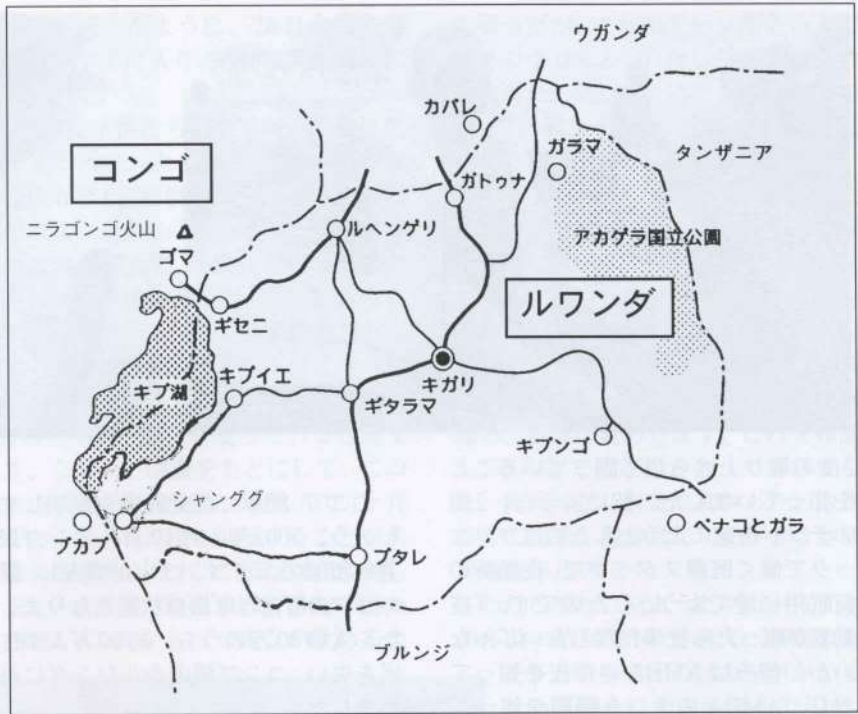
2) 難民キャンプの状況

ルワンダにはカミラ、ムデンデ、ルヘンゲリの3つのキャンプがある。AMDAは、その中のカミラ避難民キャンプで活動をした。カミラキャンプの人口は9700人。15歳以下の子どもが2400人、うち5歳以下の子どもが332人いる。国連高等難民弁務官事務所（UNHCR）と地方行政省が共同管理し、その下に各種国連機関やNGOが救援活動をしている。カミラキャンプは中継キャンプとして、98年から存在しており、旧ザイルの内戦で逃れてきたコンゴ難民のためのキャンプである。そこを今回の火山による被災難民のために使用している。

AMDAは、ギゼニ州の副知事を表敬し、カミラとムデンデの2つのキャ

ンプで活動することを打診された。その後、カミラキャンプのクリニックから救援の要請があり、同キャンプで活動することに決めた。AMDAはクリニックの要請に基づき、支援の行き届いていない臨床検査と栄養支援の2つの活動を実施することに決めた。栄養支援に関しては、日本チームによる子どもたちの栄養・健康状態調査で、ニーズが高いと判断し開始した。被災民の一部はゴマに帰っているが、キャンプ内にとどまっている人もいる。その理由は、住む家も、仕事も、学校もないからである。また、再噴火の危険があるといわれているためである。

AMDA 本部 (日本)	野村 由香 (のむら ゆか)	看護婦 横浜市西区在住
	マリー・ルイズ・カンベンガ (Ms. Marie-Louise Kambenga)	通訳兼調整員補助 福島県伊達郡在住 ルワンダ国籍
AMDA アフリカ地域事務所 (ケニア)	横森 健治 (よこもり けんじ)	主任調整員 ナイロビ駐在
	ジョン・デリトゥ (Mr. John Nderitu)	ロジスティック・会計/栄養担当 ケニア国籍
	チャリティ・カリミ・キアンジ (Ms. Charity Karimi Kianju)	看護婦 ケニア国籍
AMDA ルワンダ支部 (ルワンダ)	ダヒマラ・ジーン・ダマセン (Mr. Ndahimana Jean Damascene)	調整員 ルワンダ国籍
	ドゥサベ・ジャンボ・ビンセント (Dr. Dusabe Jambo Vincent)	医師 (一般医) ルワンダ国籍
	キセベラ・フセイン (Dr. Kisebela Hussein)	医師 (外科) ルワンダ国籍
	ムケシマナ	臨床検査技師 ルワンダ国籍



AMDAの旗

—コンゴ火山噴火避難民への緊急救援—

AMDA アフリカ地域事務所 (ケニア) 主任調整員 横森 健治

NGO間の争い

「あっ、テントにAMDAの旗がない」「また、トラブルか?」1月27日、溶岩に押しつぶされたゴマの町を視察後、ルワンダのカミラキャンプに戻った途端、またもわたしたちは活動場所を失っていたのです。AMDAの旗は、その日の朝には、支援対象である政府系クリニックから提供された3つのテントに掲げてありました。クリニックの担当者、ボナ氏に尋ねると、ノルエーの援助団体がそのテントでAMDAが活動することに反対して、外したとのこと。これで、テントを失ったのは2度目です。

1度目は、別の医療系NGOとのトラブル。前日の26日、クリニックからその玄関前にある空きテントを一つもらい、すぐAMDAの旗をつけました。すると、この団体の責任者が現れ、このテントはクリニックのものではなく自分たちの所有物だから、AMDAは出て行け、というのです。そこで、クリニックに相談しその隣のテントに移ったのですが、またそこを追い出されたのです。

他のNGOの所有テントや他の団体

が使う予定で建てたテントを、AMDAに使ってよいと許可を出すクリニックを相手にしては埒があかない。わたしと通訳のルイーザさんは、その日のキャンプ会議においてテント問題を訴えました。「わたしたちはすぐに臨床検査を始めたいので、テントの問題を早急に解決していただきたい。」幸い、毎日実施されるキャンプ会議の議長であるUNHCR (国連難民高等弁務官事務所) 調整官が、UNHCRの責任で善処すると約束しました。

翌28日、前述の医療系NGOがテン

トを撤去し、去りました。このNGOはAMDAが来るまで、クリニック前の一等地でワクチン接種などを行っていたのですが、すでに活動を終え、AMDAが来たときにはテントをまったく使わずに空のまま置いていたのです。クリニックはその日、このNGOに対しすぐにテントを撤去するか、あるいはAMDAに提供するかを迫り、結局そこを去ったのです。

ところが、3度目の危機が訪れました。テントが撤収された直後、何者かがその跡地にテントを建てようと、2組のテントセットを置いたのです。ちょうどその時わたしたちはキャンプ内において、ギヨメという難民のおじさんが知らせてくれました。彼はクリニックに頼まれてテントを建てる仕事をしていたのですが、AMDAがテントを





2度も取り上げられて困っていることを知っていました。彼によると、2組のテントを建てようとしたのはクリニックで働く医療スタッフで、夜勤時の仮眠用に建てようとしたのです。「夜勤者が眠ったら仕事にならないじゃないか。彼らはAMDAの存在を知っており、AMDAのテント問題を知っていたはずだ。その彼らが場所を取ろうとするなんて」。驚きと同時に失望があふれました。ギヨメさんは彼らからテント設営を依頼されたのですが、ここはAMDAの場所だとそれに応じず、AMDAに知らせてくれたのです。

もう一時も待てません。今すぐここにテントを建て、AMDAの旗をつけるしかない。夕暮れが近づく中、ルイーザさんとわたしはキャンプの責任者であるオノレ氏に掛け合い、テントを手に入れました。

その後ギヨメさんに頼み、テント設営。しかし、やっと手に入れたテントは、袋から出すと腐っていて使い物になりません。ギヨメさんは、その横に置かれているクリニックの夜勤者が建てようとしたテントを使おうと提案しましたが、それだけは止めてくれとお願いし、新しいテントをとってきてもらいました。これ以上のトラブルを、避けたかったのです。午後6時、ルイーザさんとわたしも手伝って、やっとテント設営完了。AMDAの旗を、自分たちの手でつけました。

カミラキャンプで何をすべきか

しかし、テント確保が1月28日まで長引いたことは、不幸中の幸いだったかもしれません。なぜなら、その日まで、臨床検査機器を調達できなかったからです。検査機器が到着しないままテントがすんなり供与されていたら、国連と他のNGOからどのような目で見られたかわかりません。

ここで、簡単に活動経過を説明しましょう。2002年1月17日、コンゴ民主共和国のニラゴンゴ山が噴火し、麓のゴマの町はほぼ壊滅状態となりました。人口40万のうち、約20万人が住居を失い、コンゴ領内やルワンダに逃れました。

AMDAルワンダ支部からの緊急救援の提案を受け、ケニアから、わたしとアシスタントのデリートゥ、看護婦のチャリテイが23日にルワンダ入り、26日に、日本から、野村看護婦と通訳のルイーザさんが到着しました。

日本隊が到着するまでに、ルワンダ支部のアレンジで、ルワンダ領内のカミラ、ムデンデ、ルベンゲリの3つのキャンプを視察しました。この過程で、カミラキャンプの政府系クリニックから臨床検査に対する協力を求められました。

AMDAとしては、医師と看護婦を連れて来ているので、診療活動もぜひしたいところでした。25日の段階で、カミラキャンプの責任者であるオノレ氏も、保健セクターの調整役である保健省のオクタビエル氏も、臨床検査とともに、キャンプからギゼニ病院までの急患の移送を依頼してきました。わたしたちとしては、日本隊2名が来る26日までに、診療と臨床検査の準備を整え、急患移送については車両が揃っているときに協力しようと考えていました。

そこで、1月26日、日本隊をカミラキャンプに迎える日に、デリートゥとフセイン医師をルワンダの首都キガリに派遣し、診療用の薬品を購入し、顕微鏡などの検査機器を借りようとしたのです。わたしとチャリテイ看護婦はキャンプ内の一般状況を調査し、彼らの帰りを待ちました。しかし、夕方6時を過ぎても、7時を過ぎても帰って来ません。難民たちから、毛布一枚で

は夜が寒くて大変だと聞いていましたが、8時までクリニックで待ったおかげで、その寒さを体験しました。マットレスのないテント内で、毛布1枚で過ごすには寒すぎます。ブルブル震えながら、待つこと3時間。やっと現れた彼らは、なんと薬品も買えず、顕微鏡も借りられなかったというではありませんか。薬品に関しては、この日は土曜日で店が閉まっていた。顕微鏡は、約束しておいた人がどこかへ行っていなかった。2人は疲れた表情でそんな説明をします。これは明らかにアレンジの失敗でした。フセイン医師が携帯電話で何度もキガリと連絡をとり、大丈夫だと言った言葉を信じていたのに…。

そんな最悪の状況で、野村看護婦とルイーザさんが彼らと一緒に到着しました。2人は、日本とケニアから託された追加資金を持ってきました。これで、どんなことができるのか、具体的な計画が立てられます。その夜は、真剣な激しい方針決定会議となりました。

26日までの方針は、臨床検査、治療、急患移送でした。しかし、この日のチャリテイとわたしの調査で、クリニックの診療体制はほぼ確立されており、その目線でAMDAが診療活動することは治療の競合になることがわかりました。

では、AMDAは臨床検査と急患移送のみを行うのか。これには、日本隊の野村看護婦とルイーザさんが反対しました。彼女らの意見は、緊急救援においては難民が必要としている物資を供与することが、一番喜ばれるというのです。ルイーザさんは、自身が94年のルワンダ大虐殺の際に難民としてゴマのキャンプで暮らした経験から、食べ物や毛布が一番欲しかったと主張します。野村看護婦は、栄養面で物資供給することで、子供たちの健康状態は

すぐに向上し、病気にかかりにくくなると訴えます。ここで、チャリティは重要な発言をしました。現在、クリニックが、子供の栄養状態改善のため、栄養不良児のレベル別に低度・中度・極度の3段階に分けて、健康状況を調査しているというのです。キャンプ内にかんりの数の栄養不良児がいることは、確かです。これらの意見により、子供に対する栄養補助という新しいアイデアが出たのです。

つまり、臨床検査、栄養補助、急患移送がわれわれの活動として絞られました。ただし、これを、どのくらいの規模でいつまで継続するのかについては意見が分かれ、この夜の会議では結論が出ませんでした。「今夜はゆっくりベッドで考え、明朝もう一度話しあおう」と各自に課題を投げました。

翌27日朝の会議では、ルワンダ支部のダマセン局長が真っ先に発言しました。「臨床検査では、顕微鏡を購入し、臨床検査技師を雇い、3ヶ月間活動を継続する。使用する顕微鏡は借りるのではなく購入し、AMDAが去るときにクリニックに供与する。栄養補助は、子供を対象に食糧等を供与する。これは、ケニア隊と日本隊がいる間に実施する。急患移送については、24時間の救急車としての役割を引き受けることはできないので、AMDAの車両がキャンプ内にある時だけ、ギゼニ病院まで患者を運ぶ。日本隊とケニア隊が去った後は、ルワンダ支部が責任を持ってこれらの活動を引き継ぐ」。この提案は、全メンバーから賛同を得ました。

ダマセンは、昨晚、必死で考えたのです。彼の部下であるフセイン医師が薬品も顕微鏡も入手できずにキガリから戻ったこと、彼自身、別の用事で2日もキャンプを留守にせざるを得なかったことなど、初めはシリアスに考えていなかったことに、責任を感じたようです。そして何より、日本隊とケニア隊が去った後、国連やルワンダ政府、他のNGOと顔をつき合わせて仕事をしていくのは、他ならぬ彼とフセイン医師なのですから、真剣にならざるを得ません。

顕微鏡の到着

この方針決定から、流れが完全に変わりました。わたしたちの計画することがどんどん実現していったのです。

すでに述べたように、28日夕方にはテントが手に入り、活動場所が確保できました。

また、子供たちの栄養調査を続けていくうちに、あるNGOが121名の孤児を収容し、面倒をみていることがわかりました。その責任者のルドルフさんはコンゴ人で、子供たちに粉ミルクを与えたいが、予算がないと訴えます。彼らのテントに入り子供たちと話す、やはり夜の寒さをしのぐ毛布が不足していることがわかりました。2、3人で1枚の毛布を使っている状況です。こうした調査をもとにして、この火山孤児たちに対し、粉ミルク1ヶ月半分、毛布140枚を供与することが決まりました。それまで限られたお粥、豆、ジャガ芋だけを食べてきた子供たちは、「これからはミルクが飲めるよ



おー」と歓声を上げました。そして1人1枚の毛布を確保することができるようになりました。

さて、最も重要なのは顕微鏡です。検査対象は便と血液で、その中の寄生虫やマラリア、赤痢等を調べます。顕微鏡の他に試薬や各種付属品が必要です。1月28日朝、フセイン医師はこれら検査機器セットを購入すべく、再びキガリへ向かいました。このときの彼の顔は緊張していました。もう失敗は許されません。ダマセンとルイズさんは「今回、もし顕微鏡が買えなかったら、戻って来ないで下さい」と同じ言葉をフセイン医師に投げつけます。彼は、いつものように「大丈夫、問題ないよ」と笑顔で出て行きました。

その日、チームメンバーの関心は顕微鏡ただ一点でした。ところが、夕方5時には戻る予定のフセイン医師が戻りません。また、トラブルにあっているのではないかと。8時の夕食を終えてギゼニのグローリアホテルに戻ると、ホテルのボーイが、ドクターはいった

ん帰ったが、また出ていったというではありませんか。わたしたちは考え込みました。こんな夜にどこへ行ったんだ。彼の帰りを待つ時間はとても長く感じられました。

そして、ついにフセイン医師が現れました。みんな一斉に訊きます。「顕微鏡は?」「買って来たよ」「実物を見せてくれ」みんな小走りで彼の部屋にだれ込みました。あった。木箱の中に、電気でも野外の光でも使える銀色の顕微鏡が、納まっています。試薬と付属品も、十分な量あります。これを確認し、みんなで彼と抱き合って喜びました。良かった。本当に良かった。抱き合って拍手。抱き合って拍手が5分ほど続いたのです。

わたしたちの泊まったグローリアホテルは一泊500円の安宿で、共同のトイレとシャワーにはカギがかからないというひどいホテルでした。しかし、そのバーは毎晩盛況で、娯婦と酔客が深夜まで嬌声を上げています。ただしこの夜は、居合せた客たちが、わたしたちの歓声に驚いていました。

翌29日から、AMDAテントでは、フセイン医師と臨床検査技師のムケシマナさんが白衣をバリッと身に着け、検査を開始しました。フセイン医師は、検査の手順、判定方法等を丁寧に彼女に指導します。クリニックからは、次々に便と血液のサンプルが送られてきます。

1月28日にテントと検査機器が同時に揃ったのはどういうめぐり合わせでしょうか。メンバーからは、「これは神のアレンジではないか」という声が出ました。それほど、ぴったりタイミングの合った出来事でした。

テントから検査室へ

カミラキャンプの難民たちは、ほとんどが、ゴマから歩いて国境を越えてギゼニの町にたどり着き、そこからルワンダ政府のトラックでキャンプに連れて来られました。彼らにゴマに戻るつもりかと尋ねると、「家がない。仕事がない。子供の学校がない。そして、火山がまた噴火するかもしれない。だから、もうしばらく様子を見る」といった返事が主流でした。

ゴマの視察では、町の真中が24メートルの溶岩に埋め尽くされ、住居も役場も商店街も学校も機能しなくなっ



た惨状をみました。町の約8割が破壊されたそうです。国連によると、テントや食糧はほぼ整いつつあるのですが、収入源をどうやって作り出すかが問題だとのことでした。ゴマを含む北キブ州の政府責任者は、地域社会の中心である学校が44校も潰されたので、これをなんとか早く再建したいと話していました。マグマからは白いガスが立ち上り、マグマに破壊されたガソリンスタンドでは、燃料がいまだに燃えています。そのガスは目と鼻を刺激し、長い時間マグマの上にいることはできません。地震も時々起きます。カミラの難民が言うように、帰還に関しては、しばらくは様子を見たほうが賢明だと思われました。

カミラキャンプの子供たちは外国人が大好きで、野村看護婦とわたしは5歳くらいの子供たちに囲まれ、写真を撮ってくれとせがまれました。このキャンプの人口は9700人で、15歳以下の子供は2400人、そのうち5歳以下は332人です。旧ザイルの内戦で逃れてきたコンゴ難民の中継キャンプとして、1998年から存在していましたが、そこを今回の火山による難民が使っています。キャンプを管理しているUNHCRと地方行政省は、生存に必要な食糧としてトウモロコシの粉と豆類、調理油などを配給しますが、毎食同じ物を食べていると誰でも元気がなくなります。テントと毛布も配給されますが、こちらも死なないための最低限の物資です。このような環境は、少しずつ彼らの病気に対する抵抗力を奪っていきます。子供たちの中には、たんぱく質とカロリーの不足のため、お腹の膨れた子が目に付きました。

栄養失調の子供はたくさんいるのですが、AMDAは中でも親がいなくて最も悲惨と思われる孤児を対象を絞り、支援することにしました。この孤

児たちは、今回の噴火による孤児や、噴火から逃げる際に親と離れ離れになった子供や、噴火以前からの孤児も含まれます。1月30日、約束どおり、粉ミルクと毛布を供与し、先方からは感謝の書簡と物品領収書を受け取りました。野村看護婦とフセイン医師は、彼らのテントを頻りに訪ね、孤児の健康診断を進めました。栄養改善は、栄養補助と同時に、子供の体の状態を個別にチェックしながら進め

なければ効果が上がらないためです。その診断の中で、ある子に赤痢の症状が認められました。すぐにフセイン医師はクリニックに報告し、その子を隔離し、便検査を行いました。結果は陽性。その後、キャンプからその子はギゼニ病院に運ばれ、隔離病棟に移されたのです。カミラキャンプには、AMDAのフセイン医師以外に正規の医師がいません。クリニックの「先生たち」はみんな医療助手です。この一件はキャンプ内に知れ渡り、AMDAの医師が赤痢の感染拡大を止めたと高く評価されたのです。それ以来、フセイン医師に数多くの医療アドバイスが求められるようになりました。

1月31日、ケニア隊と日本隊がカミラキャンプの責任者や関係者に別れの挨拶をしたとき、保健省はクリニックの中心部の部屋を臨床検査室としてAMDAに与えました。そして、クリニック前のテントはまだ必要かと尋ねました。わたしたちは、その場で、空のテントを使わずとっておくのは某NGOと同じやり方であり、要らないものは返すべきだと結論を下しました。わたしたちの検査機器は、新設されたAMDA臨床検査室に搬入され、電気と流水が使える衛生的な場所で臨床検査ができるようになりました。このAMDA臨床検査施設は、9700人を擁するカミラキャンプ内で、唯一の検査施設です。

わたしたちは、あれだけ苦労して手に入れたテントから出ました。そして、AMDAの旗を降ろしたのです。もう、旗は不要です。AMDAの存在はクリニックにとって、なくてはならないものになったからです。

ケニア隊と日本隊は翌2月1日にケニアに戻り、日本隊は2月5日に帰国しました。今回は、ケニア、ルワンダ、

コンゴ、日本によるAMDA多国籍医師団となりました。ケニア事務所が指揮をとり、AMDA本部と連絡を密にとりながら進めましたが、通信事情の悪さと言葉の問題に悩まされました。特に、他団体との間の会議で使うのはフランス語であり、英語はほとんど通じません。スワヒリ語は、コンゴ人、ルワンダ人、ケニア人の間では通じるのですが、日本人は使えません。チーム会議でも英語、ルワンダ語、スワヒリ語、フランス語が入り乱れました。

そんな状況でしたが、チームメンバーはその結果に満足しています。「やれるだけのことはした」とみんなが思いました。限られた期間に、限られた予算で、何ができるのか。真剣に話し合えば、思いもかけないすばらしいアイデアが出てきます。それは、個々のメンバーがその役割を果たす中で掴んだ意見の集約でした。今後の緊急救援においても今回の経験を活かし、さらに効果的な対応ができるよう心がけるつもりです。

最後になりましたが、今回の緊急救援においては、在ケニア日本大使館から草の根無償資金、福島県のルイズさんの友人より女性服をいただきました。これらの物資は確実に難民に届き、彼らのために使われました。迅速なご支援、本当にありがとうございます。

* AMDAは、94年のルワンダ大虐殺を忘れていません。当時、AMDAはザイル、現在のコンゴで、ルワンダ難民を支援しました。そのとき、ルワンダから流れていった人々を迎えたコンゴで、多少の嫌がらせがあったといわれています。今回、人の流れはその逆となり、当時のことがあるので、コンゴの人たちは仕返しをされるのではないかと恐れた人も多かったようです。しかし、多くの支援団体やルワンダ人たちが、傷ついた人々を助けています。アフガン復興東京会議に世間の注目が集まる中、AMDAは被災地で、唯一の日本の団体として、活動を開始しました。アフリカは、紛争、自然災害に見舞われる苦しい大地です。しかし日本からの支援は、非常に届きにくく、長続きしにくいという問題を孕んでいます。その中にあり、今回の被災地近くにあるキブ湖は別世界、非常に美しい湖で、心が和みます。アフリカを美しい大地に戻りたいというのが、私たちの願いです。

ニラゴンゴ火山噴火被災民救援活動に参加して

AMDА登録看護婦 野村 由香

度重なる内戦で受けた傷がようやく癒され、平和が訪れようとしていたコンゴ民主共和国ゴマ市に突然襲いかかった自然災害。1月17日深夜ニラゴンゴ山は噴火し、大量の溶岩は街を一気に呑み込み、人々の生活全てをストップさせた。

日本のマスメディアはアフガン関連に集中していたせい、この災害についての報道はわずかでしかなく、私も同様情報に乏しかった。『明日、アフリカへ行って欲しい』突然のAMDАからの要請に驚き動揺した。と同時に改めてゴマ市で起きている事が、大惨事であることを知った。緊急救援なのだから突然依頼が来るのは当然である。私はすぐに家族と職場の了解を得て、最低限の荷物をバッグに詰め込んだ。今まで果てしなく遠く感じていたアフリカの急接近と、与えられた任務への不安感、そしてとにかく行って出来る事をやってこようという使命感のようなものを抱え、飛行機に乗りこんだ。日本からは私のほかに日本人の様に日本語を話す、日本在住ルワンダ出身のマリー・ルイーゼさん、そしてケニアで待っていてくださる方は、以前ミャンマーで御一緒させていただいた横森夫妻という大変心強いスタッフが同行とのことで、私の緊張は極度に達することなく、空路を経過する事ができた。機中ではルイーゼさんより、彼女自身が受けた死と隣り合わせの戦争体験、ルワンダそしてゴマの悲惨な歴史をうかがい、なぜこんなにまでして人々が傷つき苦しめられなければならないのだろうか、ぶつけようのない怒りが込み上げてきた。『はやくなんとかしたい。でも何が出来るのだろうか。どんな事が現場で起きているのだろうか…。』想像だけがぐるぐる頭を巡った。24日ナイロビに到着。ビザとエアチケットの手配を済ませ、活動場所となったギセニのカミラ難民キャンプに26日到着し、他のメンバーと合流した。さっそく現地の情報を受け、その日は夜23時頃までAMDАの活動内容についてメンバー7名で検討を行った。何が必要なのか、何が足りているのか、そして何が出来るのか。AMDАは日本から支援に来ている唯一の団体でもあったため、周囲からの期待も大きかった。できることなら全ての人に対し手

を差し伸べたい。メンバー全員がそう思っていた。しかし私達の力には限界がある。できない事を引き受ける訳にはいかない。出きる事を精一杯やろう！とメンバーの気持ちは一つになった。そして私達は当初からキャンプ内既設のクリニックより要請のあった臨床検査と栄養補給支援の2つに活動内容を絞り、実施することとした。

診察、治療、薬剤の供与に関しては、地方政府が行っているクリニックと他援助団体へ一任することとなった。

医療チーム＝治療と活動内容がイメージづけられやすいが、これは被災状況によって異なるものである。今回の災害では、死傷者は少なく外科的処置を要する被災者は、カミラキャンプにおいてはほとんどいなかった。



カミラキャンプの子どもたち

また、このキャンプは紛争難民の為のキャンプとして、UNHCRと政府の管理のもと98年より存在するものであったため、水道や排泄の設備は早期に対応ができており、そのためか感染症の蔓延は防げていたように思われた。このような状況からメディカルサポートは二重、三重には必要なく、重要なのは病気を作らない環境にする『予防対策』であり、AMDАは栄養補給支援に焦点をあてた。

キャンプ内の子供達は元気に『ムズング(白人)ムズング!』と私達を呼んで無邪気な笑顔を見せてくれた。しかしその子等の体型は異常にお腹が膨れ上がり、貧血の子供が目立つ。恐らく被災前から十分な食事は取れておらず、また寄生虫などの原因もあって慢性的な栄養失調であることは、容易に判断することができた。配給される食事は豆、とうもろこしの粉、油のみである。夜は2、3人で1枚の毛布を

奪い合いながら、空腹と寒さに耐え、時には眠れずに過ごす事もあるという。栄養不足と寒さ、そして精神的ストレスが更に体力の低下を加速させるだろう。私達は121名の孤児を支援している団体に1ヶ月半分の栄養強化粉ミルクと1人に1枚割り当たるように毛布を提供した。これで少しでも子供達の体力低下を食い止めたい、子供達から笑顔を奪わないで欲しいとただただ祈るばかりであった。

また孤児達の収容されているテント内も衛生的とは言えず、便や尿で汚染されたゴザの上に、寄り添うように夜を過ごし食事をする。空気もかなり淀んでいた。実際AMDА医師による診察と臨床検査により、赤痢患者が1人発見された。このような生活環境では容易に集団感染は蔓延していくのである。それを防ぐべく、今後もAMDА医師による健康および環境管理に期待がかかる。

こうして私達はAMDАルワンダ支部に活動をハンドオーバーし、帰路についた。今回私は日本からAMDАを代表して、会員の皆様、そしてスタッフの皆様の真心を現地に届けるという大役を頂いた。できた事はほんのわずかもかもしれないが、確実に必要とされているところに心と手が届いたのではないかなと思う。この度の活動に際し御協力頂いたAMDАスタッフの皆様、そして会員の皆様に心から感謝申し上げます。

私が見たものは確かに『悲惨』そのものの現場ではあったが、同時に人間の本当の『生きる力』を垣間見たように思う。キャンプ内にはわずかでもお金を稼ごうと、ゴザを編む人、薪を割る人、ドーナツを揚げ売る人、また逃げる際にミシンの上の部分だけ持って逃げ、それで1日中手が擦り切れるまで手回しでミシン縫いをする母親の姿もあった。そして親のお手伝いをする小さな子供達。子供ながらも、重い水タンクを運び、背中に赤ちゃんをおぶり、火の番もする。何もかも失ってしまった、でも生きていかなければという前向きな姿に何度も心を打たれた。彼等はこれまでも『悲惨』の中で生き抜いてきた人々である。私には想像のつかない傷を背負いながら幾度も襲ってくる『悲惨』に背を向けず、なんとか生きようと頑張っているのだ。彼等には平和を取り戻す底力があるに違いないと信じて止まない。1日も早く復興が進み、平和が訪れる事を強く願う。

アフガン難民支援活動報告「岩山の裾野から」

AMDА 緊急救援対策局長 小西 司

AMDАは国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)クエッタ事務所との協力により、昨年末から国境沿いのムハンマド・ケイルキャンプにおいてアフガン難民支援活動を開始した。そしてUNHCRをはじめ国際機関、現地の政府や医療機関などとの協力のもと、現在に至るまで支援活動を継続している。

年頭からは二つめのキャンプ、ラティファバドでの活動も開始した。現在までの概況を報告する。

ムハンマド・ケイル キャンプ
(Muhammad Khail)

AMDА医療支援チームが拠点とするクエッタ(Quetta)の市街から、南西に約75kmの山裾の平野にある。12月に開設されて以来、年明けまでに2万人の難民が保護されたが、2月6日現在では約5万人の人口を抱え、クエッタおよびチャマン周辺では最大の難民キャンプとなった。

AMDАは同キャンプ内にテントを構え、母親と子どもに重点をおいた保健活動を実施している。内容は、前号谷合報告に詳しいが、世帯毎の保健登録(家族の健康管理の基本データとなるカードの作成)、幼児の栄養状態測定、児童の予防接種とビタミンA投与、などが含まれる。子だくさんの11人家族というところも少なくなく、毎日150家族、少なくとも300人、多い日には500人を越える子どもたちが

訪れ、はしかの予防注射を行うテントでは、嫌がる子どもたちに言い含めて注射をうつため、日々泣き声が絶えず、作業は難渋している。

ラティファバド キャンプ
(Latif Abad)

ラティフ・アバドはムハンマド・ケイルの南7kmに位置し、国境まで約20km、峻険な山並みを間近に臨む。

同キャンプは1月16日から難民が到着し、ハザラ人など北部アフガニスタンから流入した難民を中心に形成がすすみ、2月6日現在約4,500人が保護されている。1日200世帯以上が入ってくるこのキャンプでは、AMDАは8つの仮設医療テントを中心とした診療活動を実施している。

一月下旬には、世界食糧計画(WFP)より高カロリービスケットの提供を受け、栄養不良児童たちに配布を開始した。1月末にはムハンマド・ケイルと共に、ポリオ予防のための乳幼児へのワクチン投与キャンペーンを実施した。また、ここでは、毎日のように出産があり、乏しい設備での授産は危険を伴うため緊張が走る一方、生気に乏しいキャンプに希望と活気をもたしている。

このキャンプで初めて産声をあげたのは、第七子にして初めてという女の子だった。1月21日朝母親が急に産気づいたが、母親の消耗が激しかったた

め一時は危険な状態に陥る可能性が高く、無理をおしてクエッタの病院に移送することが検討された。しかしAMDАチームのファジラ看護婦が、難産の末、元気な女兒をとりあげた。母親は出産直後から栄養不良状態が続き、現在も栄養補給を受けている。六人のお兄ちゃんに見守られて眠る赤ん坊を見ると、将来この子どもたちが平和の地ですこやかに暮らせるようにと祈らずにはいられない。

当初AMDАチームには、助産婦や産科の臨床経験の豊富なスタッフが乏しかったが、現在は助産経験の豊富な現地スタッフの参加により、素早く、的確に対応できるようになっている。

この2カ所のキャンプでの活動は、AMDА本部から派遣された谷合主任調整員、筆者と引継ぎ、現在は山上正道調整員と工藤ちひろ看護婦が手分けして全体の運営を行ってきた。我々と共に活動全般をみるのがパキスタン人のシャノワーズ調整員、医療面から適格な指揮を執るのが5人の医師たちである。そして、毎日突発的にいろいろなことが起きるキャンプでの活動には、保健医療の専門知識ももちろんだが、当の難民と母語を同じくし、かれらを思い遣る世間知に富んだ現地スタッフの働きが欠かせない。活動の拡充に伴い、AMDАに参加している現地スタッフは、両キャンプ合わせて現在総勢35名を数えるまでに至った。うち5名は医師だが、それぞれ実に様々な背景をもつ。キャンプ内の保健活動の要は保健衛生管理であるが、イスラム社会では女性患者は女性医師に、男性患者は男性医師の診療を求めため、キャンプで実際に活動に従事するスタッフの半数が女性である。工藤看護婦はつぎつぎに起こる問題のたびに彼女らの中に入り、且つ指揮を執り、見事にチームをまとめていく。

また、正式なスタッフではないが、キャンプの中に入った難民の中には、自らすすんで我々の手助けをかって出してくれる人もいる。光の宿らない目を地面に落として座り込んでいる女性が多い中、常に入れ替わりで何人もの男性が我々の存在を受け入れ、手伝おう



と申し出てくれる。

空爆が開始されたばかりの昨年10月の救援チーム派遣では、AMDAは苦い教訓を受け取ることになった。たとえ熟練の日本人チームが出かけて行っても、世界のすべてに怯える人々から急には受け入れてはもらえない。少々回り道に思えても、時間をかけて我々も共に歩く人々を求め、行動を通じて我々も平和の実現を望んでいるのだということを理解してもらえない、という簡単明瞭なことを痛感したときであった。

1ヶ月半の後に、谷合調整員が再度クエッタに渡り、現地で地道にアフガン難民への支援を続けてきた病院を始めとする関係機関と協力関係を築きあげ、今日に至る活動の基礎が確立された。

内戦、早魃、崩壊した社会資本、難民。この地域に長く、深く、厳しい問題が山積する中で、AMDAの活動はまだ、ようやくその裾野に立ったところでしかない。99年、AMDAがアフガニスタンで活動を続けていた時期、もし国際社会と私たちがこれほどの関心を持ってアフガニスタンを見つめていたならば、事態は大きく違っていただなかろうか。

平和の反対は無視と無関心であり、



難民世帯ごとの保健登録

キャンプでの活動に参加する現地スタッフ研修の様子



紛争はその結果だ。平和を守るとは、関心を持ち続けることだと考える。AMDAはアフガニスタンの人たちの

ため、今度こそ関心を持ち続けたい。アフガン難民にとっては、まだ何も終わっていない。

急募

アフガン難民支援活動での看護師募集

AMDAでは、今後難民の帰還を視野に入れ、中長期での活動に移行しつつあります。ついては、現地での活動に参加して下さる看護師を下記の要領で募集します。

派遣時期：2002年2月末より9月末までのいずれか3ヶ月以上。

赴任国：パキスタン・イスラーム共和国・クエッタ周辺。また、4月以降はアフガニスタン南部も活動地に入る可能性あり。

募集人員：看護師 若干名。

- 条件：
- ・性別、年齢不問。心身ともに健康であること。
 - ・日本国内で正看護師として5年以上の臨床経験を有すること。助産婦免許があればなお可。ないしは産婦人科での臨床経験を有すること。海外での関連業務経験があればなお可。
 - ・日常業務が英語でこなせること。医療機材、医薬品の名称を英語で理解できればなお可。
 - ・周囲と協調して業務にとりくみ、現地の文化慣習を理解できること。

待遇：AMDA規定に準ずる。なお、渡航に関わる経費はAMDAが負担する。

※問い合わせ・応募先：AMD Aアフガン難民支援事業担当まで

〒701-1202 岡山市楠津310-1
 電話 086-284-7730
 ファクス 086-284-8959

*ご応募の際は、履歴書・職務経歴書・志望動機作文(書式自由)日英各1通をお送りください。

AMDA 中国（上海）の確かな歩みに触れて

AMDA 本部スタッフ 鈴木 俊介

AMDA が人道援助を通じて中国との関わりを深めたのは、1996年2月、雲南省で起きた大地震の被災者に対する緊急救援活動が契機である。中国にとっては不幸にも、この年は四川省における雪害、貴州省における大洪水など、数々の自然災害が発生した。AMDA はその都度現場に駆けつけ、被災地の現地政府、あるいは被災住民と対話を重ね、救援活動をする一方、雲南省大地震救援の際、日本から輸送された援助物資の最初の窓口となった上海にも、こうした活動を通じた医療関係者のネットワークを構築してきた。

「いやー、実はあの時、上海医科大学附属中山病院の医師約30名が手を挙げてくれたんだよ。」と、当時を振り返り語るのは現在上海の逸仙会病院で院長を務め、AMDA 中国（上海）を政府公認の団体として組織化することに尽力されている河村靖朗氏である。河村氏は、「中国の経済開放政策はまだ途上にあり、市民活動に対する理解も十分でなかったあの時期、雲南の同胞を救うために果たしてどれだけの医師が立ちあがってくれるだろうか。」と疑心暗鬼になりながらも、AMDA の緊急救援医療チームに参加を呼びかけるため、病院の掲示板に医師募集の張り紙を出した。予想に反し、30名もの医師が緊急救援活動への参加意志を表明してくれたことに正直驚いたという。「でも、これが上海なんですね。」と、自らに語りかけるようにつぶやいた。結局北京中央政府からの通達により、30人の大医師団が雲南の地を踏むことはなかったが、手応えだけは十分感じ取れた。

それから数年が経過した今、河村氏の周囲には15人ほどの流暢な日本語を操る中国人医師・看護婦が集い、笑顔溢れる語らいの中で組織作りが進む。彼らの多くが文部省（文部科学省）の奨学金制度など利用して日本留学を

果たしている。帰国後は、その成果を胸に上海市にあるそれぞれの病院で専門医や看護婦としての腕を振るっている。彼らは言う。「中国の医者は日本ほど恵まれてないんだよ。」と。ただ、忙しい毎日の中でも日本留学中の思い出が胸中を過ることは少なくない。国民すべてに医療保健サービスの機会が行き渡っている日本のことを考えることがある。地方から病院を訪れる多くの患者に出会う度に、近年急激な発展を



小学校における歓迎式に臨む河村氏（左）と柏氏（右）

遂げた上海と過疎地との格差が拡大している現状を憂い、自分達にも何かできることはないかと考えるようになった、と語る。中でもひととき目立つのは、陳康医師（上海第六人民病院口腔科主任）、とにかく背が高い。日本語も滑らかである。現在このグループのまとめ役であり、長期的にAMDA の人道援助活動に関わっていきたくと熱く語る。

今回、このAMDA 中国（上海）のメンバーが、江西省資溪县へ3度目の訪問を企画していたので、本部を代表して私も同行することとなった。

中国は、一国二制度、経済開放政策の下に経済復興の猛努力を続けており、その成果として経済は急激に発展した。沿岸部大都市の外観は、近代的なビルが立ち並び、今や東京や大阪を凌駕すると

言ってもよいほど見事である。先般中国がWTOに加盟を認められたことはそれらを実証するものであろう。

しかしながら、内陸部の貧困の度合いは必ずしもこうした経済成長と歩調を合わせて軽減されてきたわけではなく、むしろ沿岸部との経済格差は逆に拡大の一途を辿っているという見方もあるようだ。従って、中国政府並びに国連機関、日本や欧米の各国政府は、そうした内陸部、特に新疆ウイグル自治区やチベット自治区などの西部地域、あるいは雲南省や広西壮族自治区を含む少数民族居住地域の開発支援に力を入れている。しかし中国はとてつもなく広い。人口も日本の10倍である。そうした経済協力や開発支援が、実は大海の一滴かも知れないと思うと、何か底無し沼に足を踏み入れているかのようなのであると思うのは私だけではないはずである。

一方、発展を続ける沿岸部と援助を受ける西部・少数民族地域から漏れてしまう地域は見捨てられてしまうのであろうか、という疑問もわく。どうやら中国中央政府は、そうしたどちらにも属さない地域の開発を沿岸部都市に任せようという政策を打ち出したらしい。

今回訪れた江西省は、上記政策に関しては上海市の管轄らしく、同地域の交流が進んでいると聞く。今回同行してくれた上海市官吏の柏万青さんは、



文化大革命後の「下放」時代、働き盛りの25年あまりを資溪县に捧げた。上海は生まれ故郷、資溪县は第二の故郷という。ご主人も隣県で同様の任務を全うしたとのこと。こうした「下放」時代の人間関係が今上海と地方都市をつなぐ掛け橋になっているようだ。

資溪县は林業と窯業が盛んな山間の町である。豊かであるとは言えないが、決して極貧という訳ではない。尋ねた村で一番貧しいといわれる人の家を覗かせてもらった。大きな中華鍋をかけることのできる「かまど」の存在によって、まさに中国食文化の豊かさを思い知らされた。これまで私が過去に歩いてきた途上国の過疎地に住む貧しい人の家には、かまどがあることは



小学校での授業風景。一昔前の日本を思い起こさせる

まず考えられない。こぶしほどの大きさの石を三角形に並べた簡素なものである。さて、小学校を尋ねた。校舎は古い、明るい生徒の顔がある。貧困を理由に登校できない子供の数は極端に少ない。中央政府、地方政府共に国を挙げて教育に力を入れている。資溪县では、すべての子供が学習の機会を得ることができるよう政府の役人自らが、ポケットから奨学金を提供しているという（後で聞いた裏話ではあるが）。こうした行為は中央政府によって強く奨励されているとのこと。動機は何であれ、教育機会がすべての子供に与えられることは村作り、国作りに不可欠である。AMDA中国（上海）のメンバーはこれまで、こうした地元住民による努力を少しでも支援したく、困難を抱える生徒に対して資金提供を行ってきた。今回も県内3つの小学校において奨学金を提供した。貧しさは、困難を抱える人々を救済する社会システムが欠如しているところに蔓延するのである。

医療支援活動についても方向性が固まりつつあようだ。上海の専門医が資溪县の県立病院を定期的に訪れ、診療に参加すると同時に、実地研修や技術指導を行なうことや、医療機材などの提供から始めていきたい、と河村氏は語る。特に今回は、地中海貧血が疑われる患者や治療可能な先天性の障害がそのままにされていたケースにも遭遇したようで、こうした症例を上海へ転送できる支援体制作りができれば、とこれからの抱負も語ってくれた。

党書記長、県長、（教育・保健衛生担当の）副県長を含む地元政府の方々をはじめ、資溪县の人々の温かいもてなしは、柏万青氏の人脈と、これまでのAMDA中国（上海）の交流の賜物であるとする。河村氏を中心に、同じ言葉話し、同胞のために立ちあがったAMDA中国（上海）メンバー、その精神と行動力は、あの雲南省大地震の救援に立ちあがった30人の医師と通じている。彼らの今後の活躍を心より祈念する。

これまで政治社会体制の影響もあり、中国で活躍している国際NGOの数は限られている。特に教育・保健分野でその傾向が強い。今回の訪問では「援助する」というよりも「協力する」「共に汗を流す」というようなスタンスでいることに心地良さを感じた。マクロ経済に影響を及ぼすような大きな事業も必要であるが、農村社会にしみいるような地道な草の根活動も大切であると感じる。今後、日本側からもこの確かな歩みを継続的に支援していきたい。



県病院で医療支援の歓迎を受けたAMDA上海医師団の横断幕



生徒に勉学の大切さを語りかける陳康氏



貧しいが優秀な二人の生徒に奨学金が授与される



診察を行う河村氏（内科）と辛海波看護婦



診察を行う董暉氏（婦人科）



診察を行う魏亚平氏（産婦人科）

AMDA「魂と医療」プログラム

AMDA Soul and Medicine Program

AMDA「魂と医療」プログラムは2000年に開始した、AMDAの新しい活動です。第二次世界大戦で亡くなられた全ての人たちのご冥福をお祈りするとともに、戦地となった地域の住民の方々の健康増進のため、保健医療支援を行っていくことを目的としたプログラムです。2回目となる慰霊祭は下記の日程・参加者、協力者、各現地聖職者により執り行われました。

サハリン	2001年10月18日～10月22日 参加者 最上稲荷山菩提一心寺 中島 妙江・大瀬戸 泰康 木山通宏・良重夫妻 奈良 博 (サハリン北海道人会会長) サハリン北海道人会の皆様
インドネシア	2001年11月20日～11月30日 参加者 泰養寺 寺田 光寂 AMDAインドネシアスタッフ
ミャンマー	2001年11月25日～12月1日 参加者 医王山佛教寺 宮地 甫守 小山田孝子 杉森彰子 松石明子 島田美年子(医療法人アスカ会) AMDAミャンマースタッフ
パプアニューギニア	2001年11月26日～11月30日 参加者 長楽寺 森広 賢生 川畑 静 (ホテルニューウエワク支配人)
フィリピン	2001年11月29日～12月1日 参加者 天理教道竹分教会 平野 恭助 関根 慶三 久里 武晃 (JICAフィリピン) AMDAフィリピンスタッフ



パプアニューギニア・ウエワクの慰霊祭

AMDA「魂と医療」プログラムに参加して

平成13年11月25日～12月1日

佛教寺 宮地 甫守

はじめに

私は郡佛教会の席で泰養寺 寺田僧正よりAMDAの慰霊祭についての話を聞き、興味を持ったので寺田僧正と一緒に本部での説明会に参加しました。ASMP実施国は五カ国(サハリン・パプアニューギニア・インドネシア・フィリピン・ミャンマー)であり、私は今までに行っていないミャンマーと決めました。この国は佛教国であり、多くの戦死者がいると聞いていましたし、

まだ見ぬ国に興味があったからです。ミャンマーではヤンゴンのヤンゴンセドナホテルに宿泊し、三ヶ所のパゴダ(寺院)での慰霊祭を行ないました。

参加者

僧侶 宮地 甫守

(医) アスカ会

小山田孝子 杉森 彰子

松石 明子 島田美年子

AMDA スタッフ

小林哲也 竹久佳恵 橋本直子他
現地僧侶

AMDA 現地スタッフ

慰霊祭日程

2001年11月27日 メッティーラ市

ナガヨン パゴダ

11月28日 チャパタウン市

シュエタンサー パゴダ

11月29日 パコック市

スージーパン パゴダ

慰霊祭次第

1. 入場
2. パゴダ代表者による開会の挨拶
3. 市当局代表者の挨拶
4. AMDA 菅波理事長の挨拶文代読
(AMDA ミャンマー駐在代表小林)
5. 日本人僧侶、参加者による挨拶
6. 日本人僧侶によるお祈り
7. ミャンマー僧侶によるお祈り
8. 日本人僧侶による閉会の挨拶

***ナガヨン パゴダでの慰霊祭**

AMDA の車で到着。早速本尊の前祭壇へ行くと祭壇には花、ローソク、線香が準備してあり、日本の盤子、木魚、引盤も用意されていた。このように日本式の用具があるのも納得することができた。このパゴダは日本の資金で建てられ、多くの宗教者がここで慰霊祭を行なっていると聞いたからである。日本に帰国し、関空の税関でも慰霊祭に行ってきたと言うと、さっきも慰霊祭に行った人が通過したと言っていた。

法衣を着け、席について待っているとちょうど12時に当地の僧が堂内に入り、大僧正と数名の関係者が着座。祭壇には両国の国旗が飾られ、日本から持参した千羽鶴もお供えされていた。ローソクに点灯、線香は用意してもらった当地の線香と持参した線香を立て、慰霊祭が始まった。

慰霊祭次第 5.日本人僧侶挨拶では以下のような挨拶をした。

『私はAMDA「魂と医療」プログラム合同慰霊祭に参加致しました高野山真言宗の佛教寺住職宮地甫守です。この度はミャンマーメッティラ市、チャパタウン市、パコック市(挨拶文は三ヶ所とも同じで、場所名のみその都度変更)の関係者のご尽力により本日参集の僧侶と一緒に慰霊祭を修することが出来ます事に感謝いたします。』

第二次世界大戦は21世紀における人類史上最も悲惨な出来事でした。私たちは二度とこのような悲惨な世界戦争が起こらない事を願っています。本日は当寺において日本とミャンマーの人々と一緒に第二次世界大戦で犠牲者となった両国の方々の慰霊が出来る事を大変嬉しく思います。これから真言宗の作法に依り回向致します。』

まず洒水を行ない理趣経、第二次世界大戦ビルマ戦没者慰霊之文、回向を修する。

また、慰霊祭次第 8.閉会の挨拶では『只今はAMDA「魂と医療」プログラ



メッティラ市 ナガヨン パゴダ (寺院)



ムによる合同慰霊祭が厳修出来ました事に感謝申し上げます。これも当地の関係者、特に当地の大僧正によるご協力があったから出来たのだと思っています。第二次世界大戦で亡くなられた日本の英霊、当地の方々のご冥福を回向致しましたので喜んでおられます。

私たちは平和と開発のための世界的なパートナーシップを通して世界が永遠に平和と協力のもとに生存出来る事を希望致します。本日は有難うございました。皆様方のご多幸を祈念し、お礼の詞と致します。』

慰霊祭式典後、別席でジュースの接待を受ける。周りには日本各地からの名板が多数あった。また、AMDAの巡回診療を行なっているマジス村の診療所や近くの寺内の小学校をAMDAの車で案内してもらった。

***シュエタンサー パゴダでの慰霊祭**

昨年の洪水被害者の仮設住宅村を見学、小学校に寄り子ども達にみやげの鉛筆を配り、慰霊場所へ。途中消防署に寄り、消防車の先導でパゴダに行く。

会場は本尊の前に椅子があり、僧侶と一般の人が相対して座るようになっていた。祭壇は一段高い机で、花、果実のお供があり、前にはローソク、線香をお供えする壇があったが引盤等はなかった。法会は13時から始まり、当地の僧侶は椅子でお祈りをされたが、私は本尊に対して座り、前回と同じように回向を行なった。

この会場には消防署関係者等多くの方々が参列されていた。当パゴダの大僧正から昨年来られた方(中島上人)は今年はどこへ行かれたのかと尋ねられた。また井戸掘のポンプ等を見学するなど(支援がメモ書きで示されていた)寺内を案内して頂き、耳飾りのある仏にもさわらせてもらった。

*スージーバン パゴダでの慰霊祭

ホテルから1時間位車で揺られエーヤワディー川にあるフェリー乗り場へ。フェリー貸切でパコック市に到着。まずパコック総合病院小児病棟に行き、保健大臣の弟さんの家に寄る。早い昼食を済ませ、最後の慰霊祭会場に向かう。

このパゴダのご住職であり、ミャンマー仏教会で第三番目の地位におられる大僧正が待っておられ、この場所での慰霊祭は初めてとのことで大歓迎を受けた。

まず車から降りて会場までの間は小学生、尼僧達が両側に並び、多くの人たちからの出迎えを受けながら堂内に

入った。堂内には関係者や多くの参拝者、そして先程の小学生、尼僧達も参列していた。祭壇は中央にあり花や果実をお供えし、私の前の机にはローソク、線香があり、点火して式を始めた。法要が終わって小学生、尼僧達が私に1人1人手を合わせて退出して行った。帰りのフェリーより、三ヶ所で供養した塔婆を流し、魂を供養して帰途に向かう。

三会場ともに日本から持参した線香一箱をお供えし、御供をして気持ちを表して帰った。

あとがき

AMDA「魂と医療」のプログラムに

参加し、貴重な体験をさせて頂きました。AMDAのミャンマーでの活動状況も各所で見学して、内容の理解も出来ました。

慰霊祭は国内で戦死した英霊、戦争の為に亡くなった人達の回向を塔婆によって致しました。そしてその塔婆をミャンマーで一番大きい河エーヤワディー川(この河でも多くの人々が亡くなっていると思われる)に流し、供養できたことに喜びを感じました。

このプログラムに参加出来た事、またミャンマー駐在員の小林哲也氏、その他のスタッフにお世話になり、無事終える事が出来ました事に感謝申し上げ報告と致します。

ASMP 合同慰霊祭 ミャンマー訪問団活動記録

平成13年11月25日(日)～11月30日(金)

AMDA ミャンマープロジェクト事務所インターン 竹久 佳恵

□11月25日(日)一初日一

夜の7時半を少し回った頃に、笑顔の宮地上人を始めとする慰霊団の方々が、ヤンゴン国際空港に無事到着されました。日本からの長旅にもかかわらず、皆様お疲れの色もなく元気な様子です。その後、ヤンゴン市内のレストランで夕食をとり、ホテルまでお送りしました。

今回の訪問地は、ミャンマー中部地方の乾燥地帯に位置する3都市です。第二次世界大戦の激戦地として語り継がれ、AMDAが医療・保健プロジェクトを実施しているメッティーラ市を中心に、チャパタウン市、パコック市の3ヶ所を訪問し、それぞれの都市の寺院(パゴダ)において、ミャンマー人僧侶の方々と合同で慰霊祭を行います。日本からの訪問団は岡山からいらっしやった宗教者の宮地上人と、AMDA本部に隣接する医療法人アスカ会からの参加者4名で、AMDAミャンマープロジェクトの小林駐在代表を始めとしたAMDAスタッフが同行します。

□11月26日(月)一2日目一

早朝8時半より全員でヤンゴン市内にある宗教省を訪問しました。サンルウィン局長はASMP慰霊団一行を大いに歓迎され、昨年に引き続き慰霊祭の開催に全面的に協力するとの力強いお言葉を頂きました。そしてミャンマ

一の仏教などについて詳しくお話下さいました。特に、ミャンマーにある寺院(パゴダ)については大いに話が盛り上がりました。サンルウィン局長は「聖なる黄金の塔」と言われるシュエタゴン寺院やチャイティーヨー(黄金の岩)などの有名な寺院について、カラー写真やポスターなどを交えて、詳しくご説明下さいました。

その後、建設中のACT研修センターを見学していただいた後、ヤンゴンオフィスにて、小林駐在代表が活動予定を簡単に説明しました。

昼食後、ヤンゴン空港から国内線でマンダレーに向かいます。マンダレーの新空港に到着すると、AMDAメッティーラ事務所プロジェクトマネジャーのソーテンが既に我々を待っていました。マンダレー新空港は今年の夏にオープンしたばかり。まだピカピカの施設なので、訪問団の皆様は「こんなところにこんな凄い空港があるの?」と大変驚かされていました。

マンダレーから車で揺られること約2時間半でメッティーラに到着。いよいよ明日から慰霊祭が始まります。

□11月27日(火)一3日目一

今朝は8時30分集合です。熱帯に位置するミャンマーですが、11月下旬ともなると、中部地方メッティーラの朝は、涼しいを通り越して寒いくらいです。

午後から始まる慰霊祭の前に、AMDAミャンマーの活動の1つ、巡回診療と栄養給食プログラムを訪問団の皆様に見学して頂きました。火曜日の巡回先はマジス村です。栄養給食コーナーでは、子ども達が食べている栄養食の味見をして頂きました。皆さん、想像を超えるおいしさに驚かされていたようです。

慰霊祭は12時から始まるので、その前に昼食です。今回はメッティーラ市民に大人気のお店で、初めてのミャンマー料理に挑戦していただきました。20人も入ると満席になってしまう小さなお店ですので、お昼時にはいつも大混雑しています。私達も2組に別れて食事をとりました。ミャンマー料理にも色々ありますが、中心はカレースパイスや唐辛子を使った煮込み料理や炒め物です。鶏や豚、羊、牛肉といった肉や魚のカレー、ナスなど野菜のカレー、唐辛子を使った野菜炒めなどが小皿に盛られて沢山出される、食べ放題のピュッフェ形式です。訪問団の皆様は見慣れない料理に最初は戸惑っていましたが、口に運ぶと「なかなか美味しい」を連発。予想以上にミャンマー料理は好評でした。お腹が満たされたところで、いざ慰霊祭です!

初回、メッティーラ市での慰霊祭会場はナガヨン寺院です。AMDAミャンマーの活動地の1つメッティーラ市

はミャンマーのほぼ中央に位置し、古くから交通の要所でした。細長いメッティエラ湖のほとりに広がる風光明媚なこの町周辺で、第2次世界大戦末期、敗色濃い日本軍と連合軍との間に激戦が繰り広げられ、数10万人の人が死傷しました。もちろん多くの地元の方々も亡くなりました。戦後、亡き戦友達の供養にと、多くの日本人の方々がメッティエラを訪れました。そして、国家・人種にとらわれる事なくすべての戦死者を弔い、さらには世界平和を祈るために建立されたのが、今回の慰霊祭会場、ナガヨン寺院です。その意味でもこの寺院は、まさに今回の慰霊祭に相応しい会場と言えます。

寺院には、既に大勢の方々があり、準備を整えて頂いていました。寺院内には慰霊祭の会場と、その後の交流会の会場が設けられています。寺院管理組合の方々が日本とミャンマーの国旗まで並べて下さり、合同慰霊祭の雰囲気が高まっています。また祭壇には既に供物としての果物やお花が所狭しと並べられており、ここにも日本、ミャンマー両国の国旗が掲げられていました。

会場にはメッティエラ地区の寺院全体を管轄する仏教会会長のウオッタラ大僧正もいらっしやっており、ご挨拶させて頂きました。また管理組合の執行部の方々も軒並み参列して頂き、今回の慰霊祭への関心の高さが伺えると共に、非常に力を入れてご準備頂いている様子が伝わってきます。

慰霊祭開始までのちょっとした待ち時間。宮地上人はじっと目を閉じられ、法要前の精神統一をなさっているようです。改めてこの慰霊祭に対する皆様のお心を感じ、襟を正す思いが致しました。

12時30分、予定より少し遅れて慰霊祭が始まりました。式典にはナガヨン寺院の僧侶が6名、管理組合の方々や一般の方々が40名など合計約50名の方々が参列しました。勿論AMDAメッティエラのスタッフも参加しています。司会はAMDAメッティエラのソーテンです。

まず始めにメッティエラ市を代表して、メッティエラ市連邦連帯開発協会のソーシュエ会長が、歓迎と訪問に対するお礼の言葉を述べられました。そして次にAMDAを代表して、菅波代表の挨拶文をAMDAミャンマーの小



パコック市にて

林駐在代表が代読しました。菅波代表は挨拶文の中で、アジア各国で第二次世界大戦中に戦死された方々への追悼の意と、ご協力頂いた方々への深い感謝の意を表すと共に、今後は未来世代の健康維持に向けて、医療支援活動をより一層充実させていく決意を示されました。続いてナガヨン寺院を代表してウェインダカ大僧正よりご挨拶、慰霊祭訪問団を代表して宮地上人よりお礼の言葉と自己紹介がありました。

そしていよいよ慰霊祭のハイライト、日本人僧侶によるお祈りへと移ります。真言宗の作法にのっとりお祈りと共に、祈願文を読み上げられました。その後、ミャンマー人僧侶によるお祈りが捧げられ、慰霊祭は1時間程で無事終了しました。慰霊祭の後、サヤドーウェインダカ大僧正と訪問団との懇親会を開催。参加者にジュースが振舞われ、しばし歓談した後、最後に全員での記念撮影を行いました。

式典終了後はメッティエラ市場での買い物を楽しんで頂きました。やはり女性のお目当てはロンジー(巻きスカート)です。皆様、豊富な種類の生地を前に迷われていたようですが、最後には気に入った柄をご購入された模様です。このロンジーは、柄によって女物・男物が分かれています。しかし、ミャンマーを初めて訪れる日本人にとっては、その区別が難しい所です。と言うのも、日本人の目から見ると、女性が男性物を着ても(またその逆も)全くおかしくないからです。ミャンマーで着るなら、その点を考慮しなければなりません、皆様「日本で着るのだ

から、男性用・女性用なんて気にしない!」とお好きな柄を選ばれておられました。特に、宮地上人が選ばれた黒地に金模様の柄は大変美しく、そのセンスの良さには脱帽です。

夜には、訪問団の方々の歓迎会がAMDAメッティエラオフィスのメンバーを交えて楽しく行われました。

□ 11月28日(水) — 4日目 —

今朝も8時30分集合です。今日は2回目の慰霊祭を行うチャパタウン市に向かいます。メッティエラからチャパタウンまでは車で約2時間半。途中、今年6月に起こった大規模な洪水で家を失った人々が住む、仮設住宅村に立ち寄りしました。この仮設住宅村はAMDAの支援によって建てられました。仮設住宅の他に、井戸・トイレ・学校などの建設支援もしました。

ナツ神信仰の総本山であるポッパ山などの景色を眺めながら、12時ごろチャパタウンに到着しました。チャパタウン市での慰霊祭は、街中から5分ほど離れたところにあるシュエタンサー寺院で行います。慰霊祭を行わせて頂く講堂には既にお供えや花などがセットされていて、我々は早速準備に取り掛かりました。

午後1時、慰霊祭が始まりました。お寺の僧侶8名、市の宗教局・消防局などのスタッフ・村人など合計100名近い人が参列しました。最初にチャパタウン市宗教局長のタマウン氏よりご挨拶、そしてAMDA駐在代表の小林が菅波代表の挨拶文を代読した後、宮地上人がお礼と参加者の紹介をするという前回と同じ形式で慰霊祭は進みま

す。シュエタンサー寺院を代表してチヤーティヤ大僧正より、「この慰霊祭を行える事を大変嬉しく思います。戦没者の事を忘れず、慰霊し続ける事によって、ミャンマー・日本両国の友好はますます発展していきましょう。今後もこの慰霊祭が続けられる事を願います」とご挨拶がありました。その後、参列したミャンマーの僧侶によるお祈り、そして宮地上人によるお祈りと続きました。

慰霊祭は約1時間ほどで無事終了。参列者にジュースなどが振舞われた後、解散となりました。その後慰霊団一行は大僧正のご厚意で、この寺院名にもなっている耳飾りのついた仏像を実際に拝見させて頂きました。大きな仏像かと思っていたところ、実物は高さ30cm位の小さなものでしたが、きれいな耳飾りや指輪が異彩を放っていました。権力を欲しいがままにしていた時の王様に対する皮肉の意味を込めて作られたという伝説があるそうです。この仏像、頭の上に乗せると大変ご加護があるとの事。大僧正はケースから仏像を取り出し、頭の上に乗せるよう進めて下さいます。大変恐縮しましたが、お言葉に甘え、訪問団員1人1人、体験させて頂きました。小さな仏像ですが、やはり手にするとずっしりとした重さがありました。

仏像を拝見した後、大僧正は庭で井戸を掘っている現場を案内されました。この辺りは乾燥地帯ですので、きれいで安全な飲み水の確保は非常に難しい問題です。そこで大僧正は自ら庭に井戸を掘ることを思いつかれ、農業省から井戸掘りの機械を借りて、深さ600フィート(約180m)の井戸を掘られたのです。この井戸には、今年の慰霊祭にご参加頂いた中島上人のご寄付による新品のポンプが据え付けられており、ASMPの名前の通り、地域住民の健康増進に寄与しています。

慰霊祭を全て終えた慰霊団は、一路バガンへ向かいました。バガンはカンボジアのアンコールワット、インドネシアのボロブドゥールとともに、世界3大仏教遺跡の1つです。このバガンを代表するシュエジーゴン寺院を見学したあと、ユアハウンジ寺院の上から夕日を眺めました。ユアハウンジ寺院は、バガンにある寺院の中で、上に登れる数少ない寺院の一つです。昔はもっと多くの寺院に登れたようですが、現在では遺跡保存のため、殆どの寺院では登ることを禁止しています。

夕日に沈む広大な遺跡群・無数の寺院と仏舎利塔が点在する光景に、慰霊団の皆様も大変な感銘を受けておられたようです。

本日の夕食は、バガンの伝統芸能である人形劇を見ながら食事出来る有名なレストランに行きました。若い青年達の人形さばきはなかなか見事でした。人形劇のあと、劇団の方々の取り計らいで人形操りに挑戦させて頂きました。やはり、見るのと実際操るとでは大違いです。人形は思ったより重く、数分持っただけで腕が疲れてしまうほどです。なかなか思うように操れませんが、皆様大変楽しんで頂けた様です。

□ 11月29日(木) — 5日目 —

今日はパコック市での最後の慰霊祭に臨みます。バガンからパコックまではおよそ1時間半。途中フェリーでエーヤワディー川を渡ります。AMDAミャンマーでは今回のASMP終了後、2002年1月より、パコック市内にある総合病院小児病棟にソーラーパネルの設置・医療機材の導入などの支援を行う予定です。

この最後の慰霊祭が行われるスージーパン寺院で私達を待っていたのは、なんと200人以上の子ども達です。寺院へと続く小道の両脇に、僧院学校の生徒達が一列に並び、歌と拍手で宮地上人を始め訪問団の一行を温かく迎えてくれました。最後に相応しい盛大な慰霊祭の始まりに、胸の高まりを感じずにはいられません。寺院内の準備もすでに整えられており、テーブル上にはお供え物の果物・花・ろうそくなどが並べられています。ミャンマー人僧侶5人、尼僧20名他、関係者・地域住民など約250名で会場は既に満員で、会場入り口の階段にまで人が溢れています。

今回も同じように、マグウェイ管区宗教局長のサンイン氏の挨拶、AMDA理事長挨拶文の代読と続き、いよいよ宮地上人の読経が始まりました。会場に集まった地元住民の多くは、日本人を見るのすら初めてです。宮地上人の真言宗の読経に注目が集まるのは言うまでもありません。中には、身を乗り出して宮地上人の手さばきを見ている人もいます。続いてミャンマー人僧侶による読経が続きました。慰霊祭終了後には、参列していた地域住民・子ども達・尼僧の方々一人一人が、宮地上人に手を合わせ、会場

を後にしていました。

この慰霊祭をもって今回の慰霊団の仕事は全て終了。大役を無事務められた宮地上人もほっとした様子でした。

その後、バガンに戻ってアーナンダ寺院など有名な寺院と漆工房を見学しました。漆細工はバガンの特産です。様々な形や大きさの器が作られています。工房の横にはギフトショップがあり、いつも観光客で賑わっています。宮地上人も何点かご購入された様です。

これで乾燥地帯での慰霊祭は全て終了。バガン空港から飛行機でヤンゴンに戻ります。飛行機はほぼ定時に出発。定時にヤンゴンに到着しました。

□ 11月30日(木) — 最終日 —

最終日はヤンゴンの市内観光です。慰霊団の一行はミャンマー仏教の総本山であるシュエタゴン寺院、また国内最大の寝釈迦仏があるチャウタッジー寺院などを見学した後、ロンジーやミャンマー人の誰もが使用するステンレス製のお弁当箱、食べ物などのお土産のショッピングを楽しみました。

そして夕方、「あっという間に終わってしまった」と大変な残惜しそうなまま、皆様、無事帰国の途に就かれました。

同じ仏教国ですが、ミャンマーは日本と違い南方上座部仏教です。しかし、今回の慰霊祭に参加して、国・宗教・宗派を超えて人々が何かを祈るといふ気持ちは同じなのだ改めて気づかされました。宮地上人の読経に合わせ、ミャンマー人参列者が(小さな子ども達も)手を合わせ祈り、そして私達訪問団も、ミャンマー人僧侶の読経に合わせ祈る…。参列者すべてが、日本人僧侶・ミャンマー人僧侶に関係なく、手をあわせ、戦没者を慰霊し、そしてこれからの世界平和を祈る…。ASMPの持つ意味の大きさを改めて感じずにはいられませんでした。

2回目のASMP慰霊祭もまた、慰霊団としてご参加頂いた皆様の甚大なるご協力によって、無事に終了しました。お蔭様で今年もミャンマーでの慰霊祭を成功させることが出来、皆様には心から感謝申し上げます。

ご参加頂いた皆様、大変お疲れ様でした。来年もまたASMP慰霊祭を開催し、皆様にミャンマーにお越し頂けることを心から願っております。

フィリピン合同慰霊祭参加の記

天理教道竹分教会長 平野 恭助

昨年の慰霊祭はベトナム・ハノイへ行かせて頂いた私であるが、今年も又お誘いを受け今回はフィリピンのマニラで合同慰霊祭を執り行わせて頂いた。当初インドのインパールが第一候補地であったのだが、そこはインドでも特別地区に指定され普通の査証だけでは入れないということで出発予定日の2ヶ月以上前から入域許可申請を出したのであるが、結果的には許可が容易には下りず目的地をフィリピンに変更した次第である。

今回の渡航にあたって私自身タイに私用があり、先にそれを済ませてその帰路天理教からのもう一名の参加者関根氏と合流しフィリピンに赴くという行程をとった。それゆえフィリピンのマニラとタイのバンコクとの違いがはっきりとわかって興味深いものがあった。アセアン諸国の中でタイとフィリピンはライバル的存在と思っていたが、マニラ空港から市街地へ向かう車窓から眺めた光景はあきらかにバンコクの方が一日の長がある。マニラの街並みはどこかしらスペイン統治期の名残りなのかメキシコのようなエキゾチックな情緒はあるが、マニラ湾沿いのエルミタ地区にあるホテルに逗留し日が暮れて周囲を散策に出かけた際、そここに物乞いをする子供や暗闇の街路にうづくまるホームレス達を見た時、まだまだこの国は発展途上国というイメージが拭い去られない気がした。

AMDAのラモス医師より夜9時頃ホテルに電話が入ることになっていたが、午後10時過ぎてもかかかってこない。こちらは“彼”の連絡先を知らない。明日にひかえた慰霊祭の打ち合わせをしなくてはならないのに、どうしたものか…。本当に明日が慰霊祭のつもりでいてくれるのであろうか…。昨年ベトナムで慰霊祭に参加した際、社会主義国ゆえに外国の宗教の形式にのっとった慰霊祭が出来ず本意に終わったことが思い起こされ、「今回も又トラブルか…」と一抹の不安が脳裡をよぎる。そうなれば又この誌面で菅波代表謂うところの“間接的いやみ”

を書くことになるか…などと思いながらいつの間にか眠りに落ちていた。連絡は翌朝8時過ぎにあり、その時またま食事に出て不在であった私たちに『午後3時過ぎに迎えに行く』旨のメッセージが残されていた。前夜の不安は杞憂に終わりホッとした瞬間、何故か菅波代表のにんまりとした笑顔が浮かんだ。

30日午後3時半に迎えの者が来て、慰霊祭の行われるカトリック教会に案内された。

“HOLY FAMILY CHURCH”と云う名前の教会はマニラの中でもかな



り貧しい地区おそらくスラムに近いような場所の中心に位置しているのである。周囲の家並みや人々の雑然としながらも活気のある雰囲気から説明を受けなくてもそれと分かる。慰霊祭が始まるのは午後5時の予定であったが、教会までの距離を考えれば3時半に迎えとは早すぎる…とと思っていたところ、ひどい交通渋滞を経て辿り着いたときは30分前になっていた。

AMDAの九里医師とラモス医師らが出迎えてくれ、神父さんや他のメンバーを紹介してくれた。九里医師は2年以上も伸ばしているというヒゲが印象的であった。が、AMDAのコーディネーターに共通した人当たりの良いしなやかさもちゃんと兼ね備えている。ラモス医師はその名からして男性であると思いついていた私は、初対面の時この恰幅のいい女性がモスラさん(違う)ラモスさん…とわかり、思わず言葉に窮した。

私たち天理教としては、このカトリックの教会のイエス像を前にして、神

式の祭壇を拵え御供物を供えるのに多少の違和感を感じつつも、同じ神の子として祈りを捧げる共通の思いを持つお互い、不思議と自然な流れの中で合同慰霊祭を執り行うことが出来た。前半は天理教式慰霊祭、後半がカトリックの祈りとつづく。数十名の参列者とビデオカメラが廻る中、私も祭文を読む声に力が入る。参拝の段になって神父さんたちが天理教式の礼拝作法をためらいなく行っている様を見て、やはりたとえ異文化の他宗教であってもそれに「合わせる」ことが出来得る人は真の宗教家たるゆえんと改めて納得した次第である。神父さんの賛美歌も非常に美しく神々しさ溢れるもので、こちらも自然とメロディーが口からついて出る。隣に座る関根氏が「神父は唄がうまくなけりゃ務まらないね」と耳打ちする。

祈りが終わった後は、AMDAの川崎さんが英訳してくれた私の祭文をラモス医師が英語で朗読。頭をひねって難解な祭文を格調高い英文に仕立て上げてくれた川崎さんに心より感謝の念が湧く。この地区の市長の息子と云われる青年も参拝し、そのついでにスピーチを一発。さすが政治家二世、そつがない。予定時間を少しばかり過ぎたが、感激のうちに合同慰霊祭は終わった。慰霊祭終了後、場所をかえて市内の中華レストランで会食。AMDAのメンバー数名のほか神父さん2名を含む教会関係者及び私たち天理教の者2名の計12名が集まった。外国で宗教家と云えばアルコールや煙草はタブーであり、ましてやカトリックの神父さんの前では失礼にあたると思い、飲み物にビールを注文するのを躊躇していたところ、当の神父さん方はためらうことなくビールを注文。少し驚きつつもこちらに合わせてくれたのでは…と思わず嬉しくなりたちまち意気投合。なごやかなひとときを過ごしつつ再会を期して散会した。

慰霊祭を行ったHOLY FAMILY CHURCHのすぐ脇にAMDAの診療所が建設される予定とのこと。確かにこの貧しい地域に無料のヘルスポストが建てられればさぞかし救かる人も多いことであろう。ASMPの意義がこの地に開花される日が少しでも早く来たらんことを祈りつつ筆を置きたいと思う。

サハリンでの慰霊祭

最上稲荷山菩提一心寺住職 中島 妙江

大東亜戦争を中心に、20世紀に人間が起こした戦争の被災ならびに戦病死死者の慰霊を世紀末をめどに行おうと、AMDAの呼びかけにより幕明けとなったASMPも2年目を迎えました。

さまざまな国の諸々の霊を慰めるためにご参集くださるお上人様方、信徒の皆様、さらにその主旨にご賛同下さる一般の方々心が一つにして行われる慰霊祭ですが、今回私どもはサハリンという雪国のご縁を頂きました。

慰霊祭の開催は毎年11月25日ごろとなっていますが、秋が深まると現地の気候条件が悪くなるため、サハリンは1ヶ月繰り上げての出発が決定されました。

今回サハリンを訪問した一行は、大瀬戸 泰康、木山通宏・良重夫妻、わたしこと中島妙江の4名です。

10月18日、一行はまず岡山・広島から函館入りしました。この日、木山ご夫妻は結婚記念日で、20年前の新婚旅行でも同地を訪れたとか、二度と来ることはないと思っていたと感慨深げでした。

翌朝、函館空港からサハリン航空142便にていよいよ出発致しました。共産圏だった国って、どんな国なのだろうと興味津々、自分の気持ちが少し昂ぶっているように思いました。約10分遅れでフライトとなりましたが、座席に着くとまもなく、全身はげしくマッサージ器にかけられたような振動、なんとこれがプロペラの振動です。上空に至れば止むだろうと思っていましたが、あにはからんや、着陸するまでやむことはありませんでした。鼓膜がいつ破れるかと思うような騒音、座席の堅さ、そのうえなんとはなし右ひざのあたりにすうすと隙間風のごときが吹きこむのです。もはや諦めるより方法はなし！

離陸後1時間ほど経過したころ、眼下はやっと青々とした海上にさしかかりました。

時速350kmほどの速度、また低空でジェット機では味わえない風景が感じられます。

窓外の海原や大地を眺めて、機内食を頂いて、気がつくともサハリンでした。

着陸した後もプロペラの音で耳が変、機外はピーンと張りつめた、晩秋の空気が感じられます。当日は今季初の寒冷日で、朝の道路は氷が張ったそうです。

空港ではサハリン北海道人会会長の奈良 博さんがお迎えくださり、会員の白畑さんと女性3名もお迎え下さいました。白畑さんは、我々一行の滞在中運転手兼案内役をしてくださる男性



ユジノ・サハリンスクの霊園内の慰霊碑にて

で、実直な方でした。

初日のこの日は、在ユジノ・サハリンスク日本領事館と北海道サハリン事務所にご挨拶に伺い、車の盗難防止用ブザーがあちこちで響く中をホテルに引き取りました。

翌10月20日の朝、ユジノ・サハリンスク市内にある霊園に向いました。何万坪あるのでしょうか、広大な霊園のほぼ中央に日本人の慰霊碑が建立されていました。

天候はよく、薄雪を踏む程度でした。ですが、準備をしているときから頭痛、胃痛、吐気に襲われ、ここに眠る日本人がさらされた地獄絵を思うと、ただ諸霊を和らげたいとの気持ちで祈りました。

信仰深いキリスト教信者の霊位に私どもの祈りのことばが理解していただかず、魂が落ち着かないことがあって

はせつかくの機会を頂きながら十法界の諸々霊に申し訳ないと思い、ロシア正教の各霊に通じるかどうか、マザーテレサより拝領のメダイを共に安置し、供養会を執行致しました。

聞くとところによると、ロシア政府は墓地を移動させて、大規模マンションを造成する計画があるとか、供養後体調はおさまり、言葉もなく霊園を後にしました。

食事の後、白畑さんのご案内で市内見物とお土産探しに出かけました。面白かったお土産は、歴代の首相が出てくるマトリョーシカ(組子の人形)です。

実際に街を歩くと日本で描いていたイメージは吹っ飛んでしまいました。店頭には日本や中国からの輸入品が並んでいます。街はだだっ広く、簡易舗装の道路は広く、車がお腹をこすることが多いようです。もちろん暴走族はいません。

白畑さんは昔はお金があっても品物がなく、今は品物があってもお金がない、とおっしゃっておられました。

翌21日は、ホルムスクと熊笹峠での供養がありました。再び白畑さんの運転で、10時ごろホルムスク(真岡)市に到着しました。

ユジノ・サハリンスクとホルムスクは簡易アスファルトの道路が開通したお蔭で、行き来が楽になった由、道のりは1時間余でした。道中、すすきが原のような曠野が続く中、2、3坪ほどの家屋が点在しています。雪の中どのように暮らすのかと思いながら、通過しました。

ホルムスクの日本人供養塔は、いつごろから何人の方が祀られているのか定かではないとのことでした。墓碑の正面には間宮海峡が、すぐ隣にはマンションがあり、その子どもたちが遊びに来るようです。ここに眠る諸々霊は淋しくないことでしょう。

道中で細かい氷雨になりましたが、到着したころにはかなりの降りになってしまいました。

戦中はかなりの方が海の藻屑となられ、海峡に臨むホルムスク港から後ろ髪ひかれるような思いが伝わってきて、どなたも共に供養しました。涙雨のように思えました。

雨と風の中、我々が傘をさしていないものですから、参加者の方々も傘を手にもたせません。ご高齢の方まで気持ちを合わせてくださり、感謝の念でいっぱいになりました。

ご参加くださったホルムスク市在住の北海道人会の皆様には、雨の中で出会い、降りしきる雨と風の中でたいしたことばも交わすことなくお別れしたのは、ほんとうに残念なことです。

この後、ホルムスクからユジノ・サハリンスクに戻る道中にある、熊笹峠に向いました。この峠は、敗戦になった後も当時のソビエト軍と日本人が壮絶に戦ったという場所です。名前のとおり、熊笹が白樺の根元にたくさん自生しています。

峠のややひらけた頂上に、ロシア兵のための大きな供養塔が置かれています。その近くに、敗残の日本兵が頂上をめざして登ってくるロシア兵めがけて撃ちつづけたという壕がありました。大人が十人ほど入れるくらい大きな大きさでしょうか。

風はまだ強かったのですが、雨はずでに止み、4名だけの淋しい供養でしたが、充実した供養でした。溢れる涙をこらえることができませんでした。こうして予定されていた三ヶ所の供養が無事おさめられ、我々は熊笹峠をあとにしました。

この日は最終日でしたので、日本料理店でサハリン北海道人会の方々との会食を開きました。「来年もまた来てください」とのおことばを頂戴し、その他いろいろなお話を聞かせていただきました。

皆さん明るく親切で、最高齢者は大正12年(1923年・日本では関東大震災のあった年)生まれの女性でしたが、矍鑠としていらっしゃいました。

今から4、5年前までは食べるにも事欠き、粟を食べておられたとのこと、3年ぐらい前からお米のご飯が食べられるようになり、幸せです、とお話されていました。日本は飽食で食べ

物を捨てているのに、と痛い思いでした。いつまでもお元気でいてください、と心から申し上げて、お別れしました。

お世話になったサハリン北海道人会の方々、同行の面々に感謝、また来年の慰霊祭の成功を祈って筆を擱かせていただきます。

合掌



ホルムスクの慰霊碑にて

ASMP とサハリン慰霊祭に思う

最上稲荷山菩提一心寺 大瀬戸 泰康

AMDA「魂と医療」プログラム：ASMPとAMDAが主催する慰霊とは何かを考えさせられたサハリンでの慰霊祭でした。

西暦2000年11月25日から始まったこのプログラムへの参加は、ミャンマーが最初でした。ビルマの堅琴・アウンサンスーチー氏と軍事政権といった認識しかなかった私ではありましたが、現地スタッフの小林氏によって実に有意義に慰霊を行うことができました。特に子ども病院への訪問や、井戸を掘って地域住民へ水の供給をしたいという寺院での慰霊などASMPの目的を実行しているという手応えを感じたものでありました。

日本人はよく「科学的でない」という言葉を口にします。しかし海外ではそれほど聞かないものです。むしろ人々は神への奉仕を口にし、信仰のある生活をしています。日本人が戦争で失ったものは、実は神仏への感謝と先祖へ手向ける心ではないでしょうか。日本が行った戦争行為により残された魂の負の遺産により、AMDAの医師の方々は今地での医療活動に支障をきたすこともあるそうです。「日本人はこ

んなことをした」と言われ、なかなか打ち解けてくれないという話を聞いて、「現地の方がお持ちの感情のわだかまりが、少しでも解消できるのではないだろうか、この慰霊こそが日本が行った戦争行為の魂としての謝罪ではないだろうか」と思い、このプログラムへ参加させていただきました。

宗教家として、どのような場所でのご祈祷や慰霊祭も、そのご縁を大切に、一生懸命に心を手向けます。しかしながら今回は少し思うところがあるのです。宗教家が自分で行う慰霊祭ならばこれで良いのですが、合同慰霊祭を行った場所はAMDAの医療施設が建つかどうか不明な所でした。こういった場所で慰霊祭が執り行われることをAMDAとしてはどのように思われているのでしょうか。今回の慰霊祭はASMPを理解できていない人から見ればAMDAが慰霊祭だけ行っているのではないかと疑問を抱くのではないかと思います。

ASMPの精神を高揚できる慰霊祭を是非計画してもらいたいと思います。

合掌

AMDA ネパール子ども病院 3周年記念式典 篠原記念小児病棟竣工式典

2月9日、ネパール子ども病院は200名以上の参加者の中、式典を行いました。子ども病院の3周年記念日は、昨年(2001年)の11月2日だったのですが、子ども病院の立ち上げに深く関わっていただいた故篠原明医師のお名前を頂いた新病棟、篠原記念小児病棟(一般・大部屋24床、個室2床、4人部屋12床、新生児・小児集中治療室8床)の完成と一緒に祝いたかった為、この日の式典となりました。

式典には日本大使館より神長善次大使夫妻、北川書記官、JICA CLHTPより吉山チーフアドバイザー、加藤医



師、また、モハーンバスネット保健大臣らのご参加を頂き、AMDA 菅波代表夫妻も日本より駆けつけ、長く待ち望んでいた新病棟の完成と、子ども病院の3回目の誕生日を、スタッフ及び地域の人々と共に祝いました。

当日、ブトワールはとても暖かく、日本の5月頃の気候となりました。式典は、スタッフや地域の人々の喜び、ネパールと日本の共同作業で生まれたこの子ども病院への誇りの感じられるもので、篠原記念小児病棟の完成後の報告と共に、後日、ご報告させていただきたいと思ひます。

子ども病院が、この日を迎える事が出来たことを、深く感謝しております。これまで子ども病院を見守り、支えてくださった皆さま、本当にありがとうございました。この日を更なる発展へのステップとして、ネパールの地域の子どもや女性のため、より良い保健医療サービスが提供出来るよう努力していきたいと思ひます。今後ともどうぞ宜しくお願い致します。

篠原記念小児病棟開所式に参加して

特定非営利活動法人 アムダ
理事長 菅波 茂

2002年2月9日、ネパールのブトワール市にある「AMDA ネパール子ども病院 (Shiddhartha Children and Women Hospital)」で「篠原記念小児病棟」の開会式が、保健大臣、日本大使御夫妻、国際協力事業団関係者、地元国会議員、市長など多数の関係者の方々の御列席のもとに盛大に開催された。故篠原明医師は関西医科大学出身の小児科医であった。AMDA が設立したネパール西部にあるAMDA 病院で約半年にわたり診療を実施。小児の死亡率が高いことに心を痛め、子と母の専門病院の設立に情熱を傾けて奔走した医師である。彼の情熱と阪神大震災被災者に対するネパールからの支援に共鳴した毎日新聞社社会部とAMDAの協力で「ネパール子ども病院」が発足した。毎日新聞社による支援体制とキャンペーンにより多数

開所式のプログラム 2002年2月9日(土)	
時間	プログラム
12:30	篠原新病棟開所式 Mohan Bahadur Basnet 保健大臣 神長善次 特命全権大使
12:50	着席 Bhoj Prasad Shrestha ブトワール市長及び ネパール子ども病院支援委員会会長(司会者) 着席 Mohan Bahadur Basnet 保健大臣 着席 神長善次 特命全権大使 着席 Surya Prasad Pradhan 国会議員(MP) 着席 菅波茂 AMDA 理事長 着席 Dr. Shishir Regmi AMDA ネパール代表 着席 貴賓 着席
13:00	歓迎演説 Dr. Saroj Ojya
13:15	演説及びネパール子ども病院について紹介 Bimal Kumar Thapa ネパール子ども病院院長
13:30	演説 菅波茂 AMDA 理事長
13:40	Dr. Dinesh Binod Pokharel
13:50	Dr. Rameshwor Prasad Pokharel
14:00	Dr. Shishir Regmi AMDA ネパール代表
14:10	ルバンデヒ郡地域開発委員会委員長
14:20	Mr. Surya Prasad Pradhan ルバンデヒ郡議員
14:30	吉山 たかし JICA 小児呼吸器関連疾患予防事業 最高責任顧問
14:40	神長善次 特命全権大使
14:50	Mohan Bahadur Basnet 保健大臣
15:00	感謝の辞 ブトワール商工会議所議長
15:05	閉会の辞 Bhoj Prasad Shrestha
15:10	植樹 菅波 茂 AMDA 理事長 神長 善次 特命全権大使 Mohan Bahadur Basnet 保健大臣
15:20	軽食

イオン21キャンペーン「夢ある未来」賞より AMDA へご寄付

2001年8月21日、ジャスコ株式会社はイオン株式会社に変更されました。この社名変更を契機に、消費者の皆様からの声を聞こうと、「イオン21キャンペーン『夢ある未来』への提案コンテスト」を実施されました。商品・店舗・従業員・会社のいずれかのテーマで消費者が理想とするイオンの姿への提案を募集され、「夢ある未来」賞各賞が発表されました。「夢ある未来」平和賞・環境賞・いのち賞・地域賞・グローバル賞（各1名受賞・賞金50万円）には副賞として平和活動団体・環境保全活動団体・社会福祉活動団体・地域と子ども支援活動団体、国際協力団体への50万円の寄付（受賞者のお名前での寄付）も付けられています。

この「夢ある未来」グローバル賞を、IT分野からマーケティング提案をされた岡山在住の神農邦彦様ที่受賞され、神農様からのご寄付として50万円をAMDAに寄付していただくこととなり、2月11日にジャスコ岡山店において贈呈式がおこなわれました。

神農様、イオン株式会社様、有難うございました。



神農様から AMDA へのメッセージ

イオン株式会社様からのご配慮により、(私の)地元岡山に本部があり、世界の人々への緊急救援・医療支援等のボランティア活動で貢献されているAMDAに寄付金の贈呈ができましたことは、私自身、大変に嬉しく思います。これを機会に、広い視野で、世界に貢献する人たちや組織への理解を深め、私たち個人個人にできることは何か?を考るきっかけとさせていただきます。AMDAのご活躍とメンバーの皆様の安全を心より願っております。



ネパール子ども病院3周年記念式典

の善意がこの病院に寄せられた。著名な建築家である安藤忠雄氏によるボランティアでの病院設計もありがたいことであった。病院への支援を契機にAMDA兵庫支部が発足したことも特記すべきことである。

「篠原記念小児病棟」の設立により「AMDAネパール子ども病院」はネパールではカンティ子ども病院に次いで高機能の子ども病院になった。開会式の場でネパールの智慧と日本の方法論を包括した子と母のモデル医療施設を目標として更なる努力を続けたいと誓った。

ネパール子ども病院新病棟開設
おめでとうございます

篠原 浪江

遙かネパールの地に「ネパール子ども病院」が開設され、早3年余りが経過致しました。開院以来、スタッフ並びにご協力いただいた皆様のご尽力で多くの人々に役立っているとお伺いし、うれしく、また、心強く存じておりました。来院される患者様の増加に伴い、当初の施設では手狭となり、増築される運びとなりました。その資金に全国の皆様の手で大きく発展させていただいた篠原基金をお使い頂けるとお聞きし、無上の喜びを感じております。

過日、AMDA兵庫の会合に出席させて頂きましたが、若い先生を始め、ボランティアの皆様の情熱と強い信念を感じ、頼もしい気持ちで一杯になりました。今後も皆様のご活躍とAMDAの更なるご発展を期待致しております。私共も微力でございますが、末永く応援させていただきたいと思っております。

新病棟増築完成、誠にありがとうございます。

篠原浪江様は、乳幼児の死亡率が非常に高いネパールの貧困地域での母子保健医療に力を注がれ、ネパール子ども病院設立にも関わられていながら病死された篠原明医師のお母様です。志半ばで亡くなった篠原医師の意志を受けられたお母様からネパール子ども病院へ贈られたご寄付は「篠原基金」として、病院の人材育成や医療充実の為に活用されています。

■ AMDA 神奈川支部総会のお知らせ

平成 14 年度 神奈川支部総会

日時 4月21日(日) 午後1時～2時
場所 かながわ県民センター402号室
横浜駅西口より徒歩5分
電話 045-312-1121

参加希望者はFAX046-263-0919または
fwix7324@mb.infoweb.ne.jp 小林米幸までご連絡を

関東で何ができるか考えよう会

AMDAの本拠地を遠く離れた関東に住み、仕事や家庭の事情のために海外活動にもなかなか参加できそうもない私たちにもできることって何だろう。何かしたくてたまらない、でもアイデアがうかばない。

そんなみんなで考えてみましょう、無理なくできる活動が何かあるはず。会員であれば大歓迎。僭越ですが神奈川支部が呼びかけます。

日時 4月21日(日)神奈川支部総会のあと、引き続いて
午後2時～4時

場所 神奈川支部総会と同じところです。

※当日ふらりと来てくださっても結構ですが、可能なら上記小林米幸までFAXまたはインターネットメールでご連絡ください。

■ AMDA 鎌倉クラブ総会のお知らせ

鎌倉クラブ総会

AMDA 鎌倉クラブでは、下記のとおり、総会を行ない
ます。

日時 4月11日(木) 13:00～17:00
場所 NPOセンター鎌倉
連絡先 小館 裕彦(こだて)
TEL/FAX 0467-32-3684

※当日は現在パキスタン派遣中の工藤ちひろ看護師の講演
を予定しています。

鎌倉クラブの会員のみなさん、また、新たに参加ご希望
の方はどうぞお越しください。

(初めての方は事前にご連絡ください)

AMDA 兵庫支部

山田小児科内 TEL/FAX 0798-71-9821
URL: <http://www.amda-hyogo.gr.jp>

AMDA 沖縄支部

沖縄セントラル病院内 TEL 098-854-5511
FAX 098-854-5519

「NGO相談員」

ボランティア活動を始めてみようと思うとき、寄付の活用について、あの国の治安は？など、ボランティア活動に関する疑問・相談をお引き受けする「NGO相談員」をAMDAでは鈴木 剛史と小西 司が任ぜられておりましたが、鈴木の異動に伴い、この度交代となりました。

以下の2名が本年度末まで担当させていただきます。よろしくお願い致します。



(アフガン難民キャンプにて)

●新 主担当

小西 司 (緊急救援対策局長)

財務会計、資金集めと運用、イベント企画、ネットワークなど団体の運営管理について、また緊急救援だけでなく、国際協力・国際交流活動全般について、NGO活動全般について、なんでもお答えします。



(札幌国際プラザ主催「NGOとこんには！」にて)

●新 副担当

佐伯 美苗 (コミュニティサービス局欧州担当)

得意分野は精神医療・保健、国際理解教育、国内での外国籍住民への支援など。また各種助成、イベント企画、団体のネットワークづくりについてもお答えします。

※ご相談は、AMDA への電話 (086-284-7730)、FAX (086-284-8959)、メール (member@amda.or.jp) などで受けつけております(相談は無料)。また、国際協力関連のイベントなどに参加させていただいた際にも承ります。お気軽にご相談下さい。なお、「NGO相談員制度」についてのお問い合わせは、財団法人 国際協力推進協会 (TEL: 03-5423-0571) までお願いします。

AMDA 高校生会 メンバー募集

AMDA 高校生会では新メンバー（新高校1年生・2年生）を募集しています。高校生会の活動はホームページ <http://www.amda.or.jp/highschool/> でご覧いただけます。

普段は火曜日と金曜日の放課後 AMDA 事務局において活動しています。ホームページには活動日程も掲載していますので、ご都合の良い時にいつでもお立ち寄りください。

※お問い合わせ先：AMDA 電話 086-284-7730
FAX 086-284-8959

■高校生会メンバーの声

私のボランティア

AMDA 高校生会 渋谷 未来

カンボジアで出会った子供たちの笑顔。それは私にとって、かけがえのない財産です。

私は高校入学と同時に AMDA 高校生会というボランティア団体に入会しました。当時取り組んでいたプロジェクトは、カンボジアにある老朽化した小学校を再建しようというものでした。これは、私が入会する一年前、AMDA 職員から、AMDA が保健医療活動を行っているカンボジアの地区の中に、老朽化が進み崩壊寸前の校舎で授業を受けている子供たちがいるという話を聞き、少しでも良い環境で勉強ができるようにと願い、始めたプロジェクトでした。それから二年間、街頭での募金活動を始め、地域行事にも積極的に参加しました。少しずつ私たちの活動は実現に向かっていきました。

そんな私達の活動に賛同してくださった広島企業の資金援助もあって、昨年2月に校舎が完成することになりました。

2001年3月14日、開校式に出席するために小学校を訪れた私達の目に最初に飛び込んできたのは、再建を祝うために集まったたくさんの子供たちの笑顔でした。その瞬間、自分達のしてきた活動は決して一方通行ではなかったのだという事を実感して胸が熱くなりました。

それまで、私にとってボランティアとは、ただ自分が楽しむためだけのものでした。しかし、自分たちの活動がこんなに多くの子供たちに影響を与えているのだということを知り、ボランティアに携わる責任の重さをはじめて感じました。

しかし一方で、長期にわたる内戦によりメチャメチャになった教育を立て直そうと、近年日本からのたくさんの支援金で多くの学校が新たに建設されたものの、インフレや教師の不足など様々な社会的要因が重なり、運営できなくなってしまった学校が徐々に増えているそうです。学校がないなら学校を建ててあげよう。そんな一面的な支援だけでは何の解決にもならないのだということを感じさせられました。よりよいボランティア活動をしていくためには、支援する相手の置かれている環境を



しっかりと学ぶ必要があるのです。

今、マスメディアを通じてあらゆる地域の現状が明らかになってきました。それに伴って、現状を打開する策としてボランティアに対する気運が高まりつつあります。確かに、困っている人に手を差し伸べることはとても大切なことです。しかし同時に、ボランティアには、一歩間違えれば、良かれと思ってしたことが相手にとってはありがた迷惑になりかねないという危険性が潜んでいることを忘れてはなりません。

相手がどんな状況に置かれ、何を必要としているのか。そのことをしっかりと認識し、その上で、互いのより良い未来のために自分には何ができるのか。相手と同じ目線の高さになり、自ら模索していくことこそ、ボランティアをする上で最も大切なことなのではないでしょうか。

学校が再建されて一年が経とうとしています。子供たちは今日も風雨にさらされることなく、明るい校舎で授業を受けています。いつの日か、再建された小学校で学んだ子供たちと、一緒に未来を切り開いていける日がくることを願ってやみません。

（上記は渋谷さんが通う岡山県城東高等学校内の弁論大会で最優秀賞に選ばれました。）

■事務局員からの声

「あなたたちは素晴らしい！」

「あなたたちは素晴らしい」と2月初めの土曜集会で思った。16歳から18歳。忙しい高校生活の中で、メンバーが集まる日を決めることから大変な様子である。普段は来れないが、月に一度の土曜集会には参加というメンバーもいる。その日は15人と大勢で、話にも熱が入っているのが感じられた。

それぞれが何かを求めて、新しい方向性を探している。「自分たちは何をしたいのか、何ができるのか」と。会としての共通理解の接点を求める発言もある。新しい年度も近い。出発点の確認は必要かもしれない。金子みすゞの詩ではないが「みんな違って、みんないい」と思った。「多様性の共存」AMDAの目指すところである。AMDAの職員ももう少しゆとりをもって高校生会と関わってあげられると良いのだが。

自分のことで精一杯の年頃に、時間を作ってAMDAに集まるあなたたちは素晴らしい。何かを見つけてください。今回はより多くのAMDA関係者の方々に、アピールするつもりで筆を執った。「こんなに世界を、自分を、見つめている若者がいるんです」と。
(龍門)

*ご入会、会費、ご寄付、その他ご購入のための振込は、本誌綴じ込みの郵便振替用紙をご使用下さい。連絡欄に振込目的を明記して下さい。

AMDA ホームページ
<http://www.amda.or.jp/japan>

アフガン難民緊急救援活動グラフ



はしかの予防接種



ビタミンAの補給



診療風景



診療風景



赤ちゃん誕生



キャンプ内に設けられた仮設の学校

アフガン難民緊急救援 ポリオキャンペーン



AMDA募金箱を置いていただける方はご連絡下さい (TEL 086-284-7730)

AMDA Journal — 国際協力 — 2002年 3月号

2002年 3月 1日発行 (毎月 1日発行) VOL.25 No.3 1995年 11月 27日 第三種郵便物認可 定価 600円
発行/AMDA 〒701-1202 岡山市橋津310-1 TEL 086-284-7730 FAX 086-284-8959

AMDA ホームページ
<http://www.amda.or.jp/japan>